プラトンの教育国家論

Doctrine of Plato's Educational State.

今　井　直　重

序　言
1．プラトンの教育国家論
2．国民教育管理
3．イデアと教育
4．エロースと教育
5．対話法と教育
6．哲人と教育
参考文献

序　言

すべての人間はいずれかの国家に所属して国民として生活をしている。それゆえに、人間生活は国家内存在（In-der-Welt-Sein）として、その意義を有するのである。かくのごとく、人間生活にその意義を与え（Sinngebende）価値を付与する（Wertgebende）国家とはいかなる存在（Sein）であるか。現在の国家学（Staatslehre）も種々国家の意義・価値・存在理由（ratio essendi）を論究し、国家のあるべき姿を明らかにせんとしている。しかし、私見をもってすれば、今を去る二千三百年の昔アテナイにおいて、プラトンが国家論において論じた国家理論（πολιτείά）に及ぶものはないのである。一言にしていえば、プラトンの国家論は教育国家論である。教育国家（Erziehungsstaat）とは、国家は国民たる人間をして、真に人間の名に価する人格（Person）に育成することを目的とする組織体でなければならないのである。プラトンにおいては、現在すべての国家が意図しているような、国民の物質的欲望を充足すること

とを目的とする‘物の国家’ではない。プラトンは、アテネの大政治家テミストクレス（Themistokles, 528～446 BC.）、ペリクレス（Perikles, 495～429 BC.）、アルキビアデス（Alkibiades, 450～404 BC.）等が意図した国家は物質的繁栄のみを目的とする物の国家であって、国民を道義的・人格的に育成して、人間に人間としての意義と価値を付与することを目的とする‘徳の国家’ではなかったとする。プラトンの国家は、国民の道徳的育成、人格的形成を目的とする徳の国家である。徳の国家においては、国家は国民を道徳的人格に錬成するために企図された組織体であるが故に、国家の一切の活動・機構はその目的のために集中されねばならないのである。政治も、法律も、芸術も、宗教も、学術も、すべて国民を道徳的に育成するということを焦点として行われなければならないのである。国民を人格的に育成するという見地に立って、法律家・立法者は法律を制定し、宗教家は宗教を弘布し、芸術家は芸術品を作成し、政治家は政治をしなければならない。すなわち、国家のすべての制度はこの目的に適合するようにもくろまれ、公務を負担するすべての公務員はこの目的を考慮して職務に当らねばならない。これが現在の国家にも妥当する真理でもある。現在の国家の悩みは、国民の人格的育成の欠陥にある。

この点において、プラトンの教育国家論を看取して、これを提唱して、国家の制度として採用させた、ソヴィエットのヴィシンスキーこそ卓見の士として推賞すべきである。現在ソヴィエット国家においては、国民を社会主義国家の国民として適合する人格に育成することを目的として教育が行われているのであるが、プラトンにおいては、社会主義国家の国民というような枠にはめることではなく、人間としてあるべき姿の人格錬成という人道主義（Humanism）の立場においての国民教育を目的としたのである。しかし、国家が国民教育の組織であるから、法律家・立法者・裁判官・行政官・教育者・政治家はこの目的に集中されねばならないことを主唱する点において、両者は共通であり、ソヴィエット国家をはじめ、人民民主主義国家には教育国家的色彩が多分に見られるのである。

プラトンによれば、人はポリス的存在であって、非ポリス的なるものは人たるの資格を欠く。国民であること以外に有徳な人間であることは不可能であ

る。国民各人は個人であるとともに全体の部分として、全体の一部の機能を担当する。国民各人はポリス的共同体理念を媒介として統一的となり、国家の目的である道徳的人格の育成に専念することができる。国家は国民を有徳にし、徳によって国民を幸福にすることができるのである。国民各人の幸福は、各人が徳を養うことによって得られる。国家は国民を幸福にするために、国民の徳の育成を意図する教育国家でなければならないのである。教育国家においては、特に政治家は最も偉大なる教育者であることが必要である。政治家は国民全体の師として、国民全体を指導して国民を有徳に育成する任務を担当するからである。かくのごとく、国民全体の指導・教育を担当する政治家は、思索と実践と正義の徳を兼備した哲人（φιλοσοφός）でなければならないのである。それがためには、プラトンの哲人政治家は50年の長い修練をしたのである。今日の速成政治家が果して国民の教育者たることができるのであろうか。

プラトンにおいては、国家は教育国家でなければならないし、政治家をはじめ、すべての公務担当者は国民教育という立場において、職務を遂行せねばならないことが哲学の中心問題であった。本論は以上の教育国家理論を提唱して、プラトンの教育の意義およびその方法論等について、できるだけ原文に忠実に叙述したものである。

第１章　プラトンの教育論

教育（παιδεία）とはいかにして正しく支配するか、いかにして服従するかを知るところの十分な能力のある市民になることを念願するような人間に仕立てるように、子供のうちから、かかる徳性を育成することである。[①] これとは対照に富や権力を目的とする、知恵や正義を伴わない教育は野卑なものであり、全く παιδεία の名に価しないもので、単なる訓練（τροφή）である。[②] それゆえに教育は国家の支配者たる立法家にとって最も大切なる事柄である。法律が正しく行われるならば、法の本質たる正義を国民の人格のすみずみまでも浸透させて、正義のゆきわたった合法社会（εὐνομία）[③] をもたらすので、教育は

合法社会の実現のために最も価値あるものである。④ 教育は職業や技術の準備としてよりも人格や精神の訓練のために必要である。⑤ *παιδεία* と *διδασχαλία* とを比較して論じ、*διδαρκαλία* は不幸を避けて幸福につくための備品として身をかざる複飾品であるが、*παιδεία* は人格の錬成である。⑥

しかし善良なる市民たる徳を身につけるための訓練が人格教育の目的であるということは一般にギリシア人に受け容れられた見解であった。⑦ それゆえにすべてのギリシア市民は彼等の子女を所定の教育訓練所において体育や音楽を通じて教育せねばならないとのべている。⑧

これに対してソフィストは、教育をプラトンよりも広い意味に解して、自ら徳の先生たることをもって任じていた。ソフィストの徳とは主として社会的に立身出世する術、個人的には富裕になる術であった。これらのことは、プラトンにとっては、善良なる市民になることとは無関係のことである。プラトンはギリシア精神の心髄ともいうべき伝統的正統の教育精神を説いたのである。教育の目的は人間性の理想像に向って最大限度の発現をなさしめるように、子供のうちにある資質（人格・精神の可能性）を開発・発展せしめることであると考えた。それがために若者の教育は国家の最大の責任であり、任務であると確信した。

プラトンは決して当時スパルタの採っていた軍事訓練一辺倒な国防教育に対して賛意を表しなかった。教育はすべての人間のよき性能を啓発するものであって、単に軍人としての性能を育成することを目的とするものではない。当時スパルタやクレタでは、教育をはじめすべての国家機構が戦争において勝利を確保するための目的に奉仕していたのである。⑨

国法は正義の実現をめざす神聖なる神の配慮の賜であるならば、立法者は国法の目的は国民を訓練して戦争において勝利を齎すというような偏狭な目的に限定されてはならない。蕃勇と狂暴を誇示して残虐行為をもって行う斗争は、市民の勇気と称する徳とは全く異ったもので、アテネ人の普通の考え方によれば、それは底知れぬ愚なることであって、無思慮な暴力である。かくのごときことは戦争（*πόλεμος*）⑩ ではなく暴動（*στάσις*）⑪ である。暴動は国家静謐に対する脅威である。真の勇気（*ἀνδρεία*）⑫ はギリシア伝統の徳であるが、それは

知恵（σοφία）[13]・節制（σωφροσύνη）[14]・正義（δικαιοσύνη）[15]に連なるものでなければならない。[16]プラトンが考えたのはスパルタ的訓練ではなく、人格の訓練に含まれている深遠なる思慮（φρόνησις）である。[17]かかる徳を教育するということは、徳を教えるということかどうかについて、プラトンは「それは忠告や説明や原理の証明ではなく、ソクラテスが実践したような長い実行によって、すなわち、習熟によって得られるものである。かかる習慣の効果は長い修練を必要とする。徳性が若者の内的性向となるように習慣づけることが教育の中心問題である」[18]という。プラトンは古代のアテネの市民を理想としていたのである。古代のアテネ人は他国人とは比較にならないほど有徳で善良であった。彼等は自発的に（ἀυτοφυῶς）・純粋に（ἀληθῶς）・強制的でなく（ἀνάγκης）・技巧的でなく（οὔ τι πλαστῶς）善良であった。[19]

真によく教育されたものは真に愛すべきもの[20]を愛し、正しく憎むべきところのもの[21]を憎むように教育すべきである。[22]

プラトンは時には教育を恰かも魂を一つの型にはめるようにする術（τέχνη）のごとくに説いているが、[23]これは単なる比喩にすぎないのである。教育は決して術ではなく、むしろ現実の可能性を理想の姿にまで、魂を高揚せしめる導びきであり、指図することである。行為の源である魂に、強制ではなく、衷心より納得して、正しい行為をさせるように指導することである。教育は魂を導びく業（ψυχαγωγία）[24]である。プラトンは、教育は正しい法によって若者の魂を導びいて訓練する（δλκή τε καὶ ἀγωγή）[25]ことであると説いている。

プラトンは教育をスパルタ的訓練という狭い意味より解放して、παιδεία を子供に関して、特に子供の心情的傾向について正しい方向への訓練の意味に用いたのである。[26]しかし、更に広く解して国民全体を国家の正しい組織制度に適合するように訓練し、それによって、国民各自が有徳になり、幸福を享受するように育成することが教育の本義であると考えた。プラトンは国民の融和と国家の平静を念願して、合唱や舞踊を国民教育の基本教科としたのである。[27][28]

合唱はミューズ（Muses）[29]とアポロ（Απόλλων）[30]の神の神秘力にふれるために行われた。神は祭り（συνεορτασταὶ）において、また舞踊（συγχορευταὶ）[31]において仲間となることができるので、これらの催しは単にお祭り騒ぎの解放

感をうるだけではなく、精神的な生気回復の機会を与えられるのであった。そしてこれらの催しにおいてえた歓喜によって生気を蘇生させ、同一国民としての共同親愛感・愛国精神を誘発する。[32]

かかる国民教育方法によって、正しく歌い、正しく踊る方法を学んだ人（ἄδειν τε καὶ ὀρχεῖσθαι δυνατὸς καλῶς）を教育された人（ὁ καλῶς πεπαιδευμένος）ということができる。かかる行事に訓練されていない人（ἀχόρευτος）は無教育人（ἀπαίδευτος）である。[33]これらの行事は国民的精神の高揚と国民共同意識の誘発をめざすものであった。

音楽も体育と同じく競争が行われ、その勝者は偉大な名誉を担うものとされた。婚姻・葬送・収獲祭等において音楽が奏され、宴席その他の催には参列者が順次に音楽舞踊の教養を披瀝したのである。[34]絃奏楽・合唱・舞踊・宙返り等においてすぐれている者はギリシアの紳士としての教養を身につけたものとされた。ギリシアの英雄は音楽を好み、歌をうたい、リラを奏でた。ホメロスの英雄パツロクルス（Patrocrus）も夢中になって仲間の歌に聴き入っている。[35]オデッセウスも王宮で催された舞踊会において、若者達のリズムカルな足運びや身こなし、絃楽詩人デモドクス（Demodocus）の歌に歓喜している。[36]

古代アテネにおいては、歌をうたったり、楽を奏することは、すべてのアテネ人の教育の基礎をなしていた。[37]アリストファネスもよき市民の訓練として音楽と舞踊と竪琴の訓練が必要であるとのべている。[38]音楽や舞踊の愛好はギリシア民族の最も自然なギリシア精神の発露であった。コーレイア（χορεία）[39]の二つの部分である音楽と舞踊は人間性の深底に根をおろしているのである。[40]

原初的な動物は彼等の仲間と躍んだり跳ねたりして喜んでいた。またあらゆる種類の声を発して楽んだ。これらが原初的な挙動であった。この原初的な声が整理されてリズム（ῥυθμός）となり原初的な跳躍が秩序づけられて舞踏となった[41]（τῇ τῆς κινήσεως τάξει）。そしてリズムに調和（ἁρμονία）が加わって歌となった。ダンスのリズムが整序されて舞踊（σχήματς）となり、音楽的な調べの連続が歌（μέλη）になったのである。[42]

すべての動のうちで、種々の音声や動作において秩序と無秩序の感覚を有するものは人間のみである。それゆえに音楽と舞踊を楽しめるものは人間だけで

ある。この楽しみこそ神の賜というべきである。[43] それゆえに、アポロとミューズの神は音楽と舞踊の神として、また教育の創始者である。

ギリシア人にとってはダンスは足の運びの律動的な動きのみではなく、全身、すなわち頭・腕・手・体軀・足・脚の律動的な運動である。たとえ部分的な動作は消えても全体からくる姿勢・踊りの調子、すなわち、喜びの表情・悲しみの様子が美わしく表現されるのである。それがギリシア文化の粋を表わす絵画・彫刻となって具現されるのである。

人間の生活にはいかなる部面においても、リズムと調和がなければならない。あらゆる人間の社会において、われわれはすべての人々のために調和とリズムのある行動をするということが精神的貴族のあるべき生活態度である。[44] かくして、リズムとハーモニーを社会生活において用いることがとが *παιδεία* であるということができるのである。歌と舞踊はすべて人間の感情や思想や人格の表現である。[45]

また歌や踊りのうちに道義的性格が含蓄されているのである。[46] そしてそれらは人々に道徳的訓練を与えるのである。踊りの動作や歌は魂の純化に役立ち、魂を美わしくする。いかに美わしく歌い踊るかということを知ることは熟達した演技者になることではなく、それは人格と行為において善美になることに役立つものである。人格の善美なる人はかかることに喜びを感ずるのである。これが教育ある人の態度であり、たしなみである。[47] すべて芸術の与える喜びは善人に対して与える喜びでなければならない。それは教育のない人々の喜びではない。[48] 教育のない人々をも教育のある善人の喜びを感ずるように教育するのが歌と踊りの教育の価値あるところである。プラトンは喜怒哀楽の情も歌や踊りによって訓練されねばならないことを説いている。[49] 子供は彼等が喜ぶように習慣づけられたことに喜び、憎むように習慣づけられたことに憎しみを感ずるものである。同様のことが大人についてもいわれることができる。[50] 正善に対する好感、邪悪に対する憎悪を感ずる心情の訓練は踊りと歌においてなされなければならないのである。プラトンはファイドロスにおいて、哲学は最高の音楽（*μεγίστη μουσική*）であるとのべている。[51] 高級なる音楽は芸術の範囲を越えて道徳や哲学や政治の範域に進んで善美の領域にはいりゆくものである。音楽

は広い意味における哲学である。完全なる音楽家は哲学者である。というのは人間の性向を調和する方法を知っているからである。[52]

アテネ人は若者をかかる音楽舞踊の会合に参加させるようにし、彼等を指導するのに努力を捧げたのである。これをよく行うことは道徳教育における重要な役割を果すことになったのである。[53] またかかる会合において教育ある紳士は若者と種々の対話をして楽しみ、有益なるものを彼等に授ける機会が与えられたのであった。[54] キタラ（κιθάρα）[55] と称するリラを伴奏してうたう歌をきくときに、アテネ人は自分達は皆同じアテネ人であるという祖国意識が生き生きと蘇えるのを覚えたのである。[56]（ἐν τοῖς παρ' ἡμῖν τόποις）ディチュランボス（διθύραμβος）[57] コーラスはアテネの市民によって組織され、伝統的に50人で構成されていた。毎年一回合唱が催され、すべての歌のうちで最も国民に教育的効果を与えたものであった。文芸の大神ミューズの讃歌のコーラスは青年男女によって構成されていた。[58] 知恵の大神アポロのためのコーラスは30才以下の人々で行われた。[59]（恐らく20才と30才の間の年令の人で構成されていた）また狂乱の神ディオニソス（Διόνυσος）のコーラスは30才以上60才以下の人々で構成されていた。[60]

子供が大人とともに歌ったり踊ったりすることによって同じ好悪の感情が育成され、魂のうちによき性向が生みつけられ善良なる市民に教育されることができるのである。[61] 国家の教育的任務は絶えず英雄を讃え、神を讃え、善美を讃える頌歌（ὠδάι）[62] を唱して、真に善良なる市民になるように頌歌訓練（ἐπωδαί）することが必要である。頌歌をもって絶えず子供を善良な性向に育成するように工夫することは神と人との会交する神秘的な教育である。[63]（ἐπᾴδουσαν μὴ παύεσθαί ποτε）

音楽は子供のみならず成人といえども成人教育に役立つものであり、道徳教育にも大なる効果を与えるものである。[64] また神々への讃歌を捧げるコーラスの会合は（σύλλοίοι, συνουσίαι）[65] [66] は過度と無秩序を抑制して良識を保持するために夫々の神官主催の下に規律正しく、法の支配の下に（συμποτικοὶ νόμοι）[67] 行われた。ここに遊び（παιδία）のうちに遊びとともに養われる教育（παιδεία）の意義を見出すことができる。こういうことをプラトンは人格錬成の本質的要

件と考えたのである。[68]

教育の基本は音楽と体育による魂の育成におかれた。音楽は体育の前にはじめられねばならない。また音楽には文学（λόγοι）も含まれていた。文学には真実のものもあれば、偽りのもの（νῦθοι）[69]もある。われわれは子供が大人になったとき彼等が矛盾を感ずるような物語りをもって教えこまないようにしなければならない。物語りは教える前に係官によって検閲されねばならない。若しそうすれば現在ある物語りは大方拒否されるであろう。[70]クロノスとウラノス、ゼウスとクロノスの物語りのようなものは、それ自体が偽りであるのみならず、たとえそれが本当であるとしても、子供達に教えられてはならないものである。またかかる詩や文学によって教えこまれた子供達は、神々はお互に喧嘩をし、斗争するものであると信ずるようになる。というのは子供は物語りのうちに存する深い意味（ὑπόνοια）[71]を理解することができないからである。すなわち、子供は文字とその精神とお区別することができないのである。そして幼少の時代にうけた印象は大人になっても仲々消えるものではないからである。[72]

註 ① Politeia, 643e.

② Ibid, 644a.

③ Ibid, 544c, The Characteristic of Sparta.

④ Ibid, 659de.

⑤ Sophistes, 229d.

⑥ Philebos, 55d.

⑦ Protagoras, 326c.

⑧ Ditto.

⑨ Aristoteles, Politica, 1324b. 8.

⑩ Politeia, 358e. 373e, 586b. The natural condition of mankind.

⑪ Ibid, 415d, 462a, 470c, 471b.

⑫ Ibid, 375a, 459c, 386a, 399c, 410e.
Courage as one of the four cardinal virtues embodied in the city and in the individual.

⑬ Ibid, 428b, 429a, 441c.

⑭ Ibid, 389d, 430d, 432a, 413c.

⑮ Ibid, 331c, 337a, 442e.

⑯ Nomoi, 628c, 630d.

⑰ Politeia, 428b, 518e.

⑱ Nomoi, 642cd,

⑲ Ditto.

⑳ 正しい立法家の定めるところのもの

㉑ 正しい立法家の禁止するところのもの

㉒ Nomoi, 653a, 659d.

㉓ Ibid, 666b, 671c,

㉔ Phaedrus, 261a.

㉕ Nomoi, 659d.

ἀγωγή という語はプラトンの当時はスパルタ的な訓練を意味していた。プラトンはノモイ篇において4回 *παιδεία* と同じ意味で *ἀγωγή* を用いている。(Nomoi, 645a, 659d, 673a, 819a.) (Politeia, 604b.)

アリストテレスは Nicomacheia 倫理学において、プラトンと同じ意味において *ἀγωγή* を用いている。(Aristoteles, Nic. Eth. 1179b31, 1215a32, Politica, 1292b 14, 16)

またタレンツムのアルキタス (Archytas) も同じ意味において使用している。*ὑπερ παίδων ἀγωγῆς*. (Diels-Kranz, 1, 439, 24)

㉖ Ibid, 653b.

㉗ Ibid, 653cd.

㉘ Ibid, 631de.

㉙ Politeia, 545d.

㉚ Ibid, 427b. Son of Jupiter and Latona,

㉛ Ibid, 412b.

㉜ Nomoi, 654a.

㉝ Ibid, 654b.

㉞ Ibid, 618c, 619c. アテネにおける歌のリストについてのべられている。

㉟ Illiad, Ⅸ,186～191.

㊱ Odysseus, Ⅷ, 256ff.

㊲ Protagoras, 326a～c.

㊳ Aristophanes, Frogs, 729.

㊴ χορεία は choral dance である。

㊵ Nomoi, 654e. このことについてはノモイの第2巻のはじめにおいて説いている、音楽と舞踏は最も原初的な人間性の発露であるとしている。

ὁρᾶν οὖν χρὴ πότερον ἀληθὴς ἡμῖν κατὰ φύσιν ὁ λόγος ὁμνεῖται τὰ νῦν, ἢ πῶς.

㊶ Nomoi, 665a.

㊷ Ibid, 654e, 672e. リズムとハーモニーについてはノモイ664e～665a. にのべられている。教育における音楽と舞踏の重要性について、アリストテレスの詩学のうちにリズムとハーモニーに関する論説がある。(Aristoteles. Poet, 1340a 2 ff. 1448b 20ff.

㊸ Ibid, 654a.

㊹ Protagoras, 326b. Symposium, 187cd.

㊺ Nomoi, 655ab. Aristoteles, Poet, 1447a 26.

㊻ Ibid, 665ab, 668b.

㊼ Ibid, 654cd.

㊽ Ibid, 659ab.

㊾ Ibid, 653b, 656b.

㊿ Ibid, 802cd.

(51) Phaedrus, 61a. Timaeus, 88c.

(52) Politeia, 432a, 443de, Politicus, 306d, 308a.

(53) Nomoi, 637a, 641d.

(54) Gorgias, 451e. Symposium, 215a, 216d, 221e. Menon, 80a. Politeia, 479b.

(55) Politeia, 399d.

(56) Citharoedic 歌はまた Nomos (*νόμοι*) とよばれた、それは国民の法と国民のうたう歌との間の密接なつながりのあることをのべているのである。(Nomoi, 772d, 799o, 800a. Politeia, 424c.)

(57) Politeia, 394c.

(58) Ibid, 545d.

⑲ Ibid, 427b, 461d, 470a.

⑳ Nomoi, 665a.

㉑ Ibid, 659de.

㉒ Politeia, 490b.

㉓ Nomoi, 665c, 666c, 671a, 773d, 812e, 837e, 887d, 903b.
Euthydemos, 290a. Politeia, 364b, 426b. Symposium, 202e,
ἐπωδαι という語はピタゴラス教国、オルフィック神秘教における呪文によって神性を得ることを意味する。(Nomoi, 700b)
ᾠδάι とは讃美歌であって、アポロの神に捧げられたものである。*διθύραμβος* はデイオニサスに捧げられた讃歌である。

㉔ Nomoi, 637a, 641d, 671a, 672a.

㉕ Ibid, 671a.

㉖ Ibid, 672a.

㉗ Ibid, 671c.

㉘ Nomoi, 671e, 656c, 789bc, 803c, 804b, 832d. Politeia, 537a.

㉙ Politeia, 377a.

㉚ Ibid, 376c.

㉛ Ibid, 378d· hidden meaning.

㉜ Ibid, 378e.

第2章　国民教育管理

アテネにおいては市民が彼等の義務を果すために厳しい国民教育の管理を必要とした。市民が国家においてその役割を果すために、いかに教育すべきかということが最も重要な問題であって、国家は国法によって周到な国家管理を行った。国法はすべて国民をして有徳にして、その義務を遂行するように育成するためのものであるから、教育法であったということができる。[1] 法は国民教育の規範として永久不滅のもの（*κατὰ νόμον τῆς φύσεως, ἀνάγκη τῆς φύσεως*）とされ、*νόμος* は不死である[2]と考えられた。

国家が若者を教育することは医学や技術のような特殊の問題について教えるのではなく、国家において善良な市民となり、国家にとって徳（πολιτικὴ ἀρετή）を行うのにすぐれた人になることであった。③ 善良な市民とは国家にとって有益な市民をいうのである。というのは ἀγαθός と ἀρετή とは共に善良であり、有益であるからである。④

子供の訓練は既に就学前から行われたのである。このことは子供の成長を促進することになるからである。④ プラトンは教育は子供の出生前から始められねばならないと考えた。⑤

いかなる男女も完全なる健康状態でなければ子を生んではならない。婚姻については健康証明書を必要とした。⑥ また男子が30才から45才まで、女子は20才から40才までなければ出産してはならないのである。35才に達してなほ結婚しない男子には独身税が課せられた。⑦ 法律の許可を得ない配偶から生まれた子供や畸形児は育てないようにされた。生殖のために定められた年令の以前及び以後において生まれる胎児は胎堕されねばならない。⑧ 親族間の結婚は人種衰頽を招くから禁止された。⑨ 優れた者は優れた者と、劣れる者は劣れる者と結婚せしめ、優れた者の子供をできるだけ養育し、劣れる者の子孫を養育しないようにする。優れた者は多くの配偶者が許されて、できるだけ多くの子を生むように奨励された。⑩ これらはすべて人種の優生学的管理であった。

結婚に関しては結婚監督婦なるものを置いて、毎日一定時にエイレイチュイア（Εἰλείθυια）⑪ の神社に集会し、結婚生活の法律の遵守について報告せしめる。⑫ 子供出産の時期は10年で、もしこの期間に出産しない者は協議の上離婚せしめる。結婚監督婦は新婚夫婦の家を訪問して忠告し、若し忠告を聴かないときは法律守護官に告げ法律をもってこれを罰する。それには特権および名誉の剝奪がある。子供が生まれたときは祖先の神社に詣でて、これを登録する。各区においては、時の区長アルコーン（ἄρχων）⑬ の名を各区の神社の白壁の上に記し、区民の氏名をその横に記す。結婚の適令は女子は16才より20才、男子は30才より35才の間とする。官職に就く者は女子は30才、男女は40才までとする。兵役は男子は20才より60才までとし、女子は出産の終りし時より50才までとする。⑭

学習については二科あって、一は身体を目的とする体育であり、他は精神を目的とする音楽である。体育には二部あって、舞踊と角力を課す。体育場および学校は都市の中央に設けられ、外部に馬術学校と射術場を置く。教育はすべて義務制とする。子供は両親のものというよりも、むしろより多く国家のものである。男女共学であって、女子にも馬術および射術を課する。[15]

更に文学および音楽については、10才より13才までは文学を学び、13才よりリラ琴（λύρα）の弾奏を学ぶ。舞踏には二種あって、その一つは真面目で且つ優美なるものであり、他は滑稽にして奇怪なるものである。前者は更に戦争の舞踏と平和の舞踏とに分つ。戦争の舞踏は、ピュラコス（φύλακος）舞といって、身振りに攻撃防禦の態度を模するものである。平和の舞踏は秩序法則の舞踏である。平和の舞踏はエンメレイア（εμμέλεια）（秩序）の舞踏と称する。これらの舞踏は立法者が法制化し、祭礼において実施した。滑稽なる舞踏は身分ある人々はこれを避け、奴隷をしてこれを演ぜしめた。[16]

神々に供える供物は365個あって、毎日どれを供えるかは祭司と通弁者の協議によって定める。毎日一人の行政官が供物を捧げる。12区において、それぞれの区神があり。毎月それぞれの神を祭り、それぞれの音楽を奏し、体育競技を行った。すべての体操運動は尚武的なものでなければならなかった。競技者は競技場に入り武装せる者のみに褒賞を与える。競走には六種があって、第一は1スタディオン（στάδιον）距離の競走である。第二は2スタディオン距離の競争である。第三は馬術競争であり、第四は長距離競争である。第五は重武装をして60スタディオンを駈けて、アレース（Αλής）神社に到る競争であり、第六は射手の競争で、山を越え、谷を渡り、100スタディオンを駈けて、アポローン（Απόλλων）神社およびアルテミス（Ἄρτεμις）[17]神社に至って決勝とする。小児は半距離とし、少年は3分の2距離とする。13才より18才までの女子は強制的にこれらの競技に加わらしめたられ。

音楽の競技は祭礼のときにこれを行う。三年毎に行うか、五年毎に行うかは、法律守護官・競技審判官・教育指導者が決定した。[18][19]

音楽と体育とは両者を調和させることによって中庸の人格を育成せんと意図されたのである。体育だけの行きすぎは必要以上に猛々しい人間をつくり、音

楽だけの行きすぎは過度に人を柔弱にする。人々がこの両方を兼備することが必要である。神々がこれらの二つの術を人間に与え、それが魂と身体とにそれぞれ役立つことのできるために、過不及よろしきをえて適度に調和されるように望むのである。[20] これがわれわれの教育と訓練の原則である。[21]

無秩序者にして真理を知らない者およびその教育が中途半端にして終結をなさないものは国家有為の人物となることができない。前者は、教育は国民として公私一切の行為の規範たるものを学ぶ義務あることを忘れたる者であり、後者は業を半ばにしていながら、終ったものであると誤認しているもので、進んで十全を期せずして、安価なるものをもって満足しているからである。[22]

先づ初等教育には体育と音楽があり、体育は身体の成長および衰頽を管理するものであり、音楽は調和（ἁρμονία）[23] によって国民を和合し、韻律（ῥυθμός）[24] によって彼等を規律するのである。[25] 次に中等教育として算術（ἀριθυμητική）[26] が課せられる。算術は技術・学術の基礎的な知識として何人も教育の初歩において学ぶところのものである。パラメデース（παλαμεδής）[27] が自ら数を発明して、ギリシアの兵船を計算し、またトロヤにおける自国軍の階列を整理したことは、武士たるものは算術の知識を有しなければならないことを物語るものである。しかし、むしろ人間たらんとすれば必ず算術の知識をもたねばならないのである。算術は自然に人を思考に導びく性質のものであって、それは人間の精神を実在の方へ向わしめる役目をなすものである。というのは感覚（αἴσθησις）[28] の目的に二種があり、その一つは思考（νόησις）[29] を誘発しないものであり、人を実在の方へひき入れるものではない。しかし算術や計算は人の精神を真理の方へ誘導してゆくものである。[30] 数学（μαθηματικός）[31] は特に護国者たる者は必ず修めねばならないものである。護国者（φύλακες）[32] たる者は武人であり、また哲学者（φιλόσοφος）[33] でなければならない。また立法者も算術を研究せねばならない。更に商人も工人も農民も、物を売買する目的のみでなく、精神が変化の世界から真理および実在の世界に進むための最も容易なる方法であるから、算術の研究を必要とするのである。[34] 算術は精神を強いて無形の数を論理的に推究せしめ、思考中は可視物（ὁρατόν）[35] の進入を拒み、雑念を払い、人の心を純粋ならしめる効力を有する。算術は心を清めるのみならず、心を明る

くし、その働らきを活発にする。それ故に算術を第一の思考の教育課目にあぐべきである。[36]

次に戦争やその他のことについて必要なる幾何学を学ばねばならない。陣営を定め、戦線を伸縮し、戦斗・進軍等の軍事上の運動において、武人は幾何学を知らねばならない。幾何学（γεωμετρία）[37]の目的とするところのものは永遠なるものの知識であって、滅亡変更するようなものの知識ではない。幾何学は精神を真理の方に引き寄せて哲学的精神を生ぜしめ、人の有するところの思想を高尚ならしめる。善美なる国家の人民だるものは必ず幾何学を学ぶべきことを義務づけなければならない。幾何学を修めた者とこれを修めない者とを比較するとき、他の方面のことがらの知識の理解において無限の差異が生ずる。それ故に、幾何学は算術に次いで、第二の学習科目と定めねばならない。[38]

更に天文学（ἀστρονομία）[39]をもって第三の学習科目とする。季候・歳月の循環についての知識は農夫および船人にとっても必要欠くべからざるものであるが、天文学は精神を向上せしめ、この地上の世界より天上の他の世界に導びくものである。実在及び不可視の知識のみよく精神を上方に向わしめるものである。仰視するところの星辰燦たる天空はなお可視の場面のものであるが、その運行の速度・距離・真正の数・形状・軌道等は知性によって知られるものであって視覚の対象ではない。[40]

しかして天文学においては眼に関するものと耳に関するものとがある。眼は諸々の星辰を見るために存し、耳は調和の運動を聴くために存するのである。いかなる知識もそれに達せねばならないところの極致なるものがある。それ故に感覚知のような不完全な知識をもって終わるべきものではない。[41]すべてのことがらは精神のうちに存する至高のはたらき[42]を高めて実在のうち最上なるもの[43]へと冥想（φρόνησις）[44]によって導びきゆくことは、身体の光明たる感官を高めて、物質界可覚界中に見られない、最も光輝あるところのものを見るにいたらしめるべきである。[45]

苟くも学術を学ばんとする者はその前提となれる仮説（ὑπόθεσις）[46]を検討せずして、これらの仮説に理由を与えることがない限り決して明確なる実在を見ることができない。すべて学術において出発点である至高のはたらきを知らず

して、結論や中間の過程のみを知ることをもって満足するならば、かかる知識は学術（ἐπιστήμη）[47]ということができない。[48]

第一原理（λόγος）[49]に遡って攷究するものが論理学（λογιστική）[50]である。論理学は論理的に推究して第一原理に至り、仮説を除去するところの唯一の学科である。論理学はわれわれの悟性（διάνοια）[51]によって明晰なる知識に導びくものである。諸学術をしてこれ以上に進みえない究極にまで高めてゆくものである。[52]

算術、幾何学、天文学等は論理学の予備たるもので少年のときよりこれを知らしめるべきものである。身体上の運動はこれを強制するも毫も身体を害することはないが、強制をもってしたる知識は決して心のうちに把握されるものではない。それ故に強制するよりも、若年のときより、これを娯楽にするように習慣づけると、遂には自然の傾向となり品性（ἦθος）[53]となるものである。[54]

理想国家においては、最上の素質を備えた者は、学問研究に専念させられ、善のイデアを諦観するまで上昇させられねばならない。かくのごとき訓練を経た人が最高の知恵ある哲人であって、国家の統治者として最も適合する人格である。[55]彼の統治する国家は国民を有徳にし幸福ならしめるためであって、決して権力欲にかられて政権を私利の具に供する職業政治家とは本質的に異なるものである。しからば国家統治の真の適任者たる哲人はいかにして育成されるか。それには人間の魂をして、生滅するものから実在するものへ、可視的なるものから可思的なるものへ、一時的なるものから恒久的なるものへ、向わしめねばならない。先づ初めに体育と文芸が課せられる。体育は生滅するものを対象とし、音楽は一種の調和的気質と律動的態度とを訓練するが、認識（ἐπιστήμη）[56]を与えない。また個々の技術（τέχνη）も職業的であって、認識を与えない。[57][58]算術は技術・学問に共通に必要なる基礎として課せられる。算術は精神を思考へと導びくのみならず、イデアへ向わしめるのに役立つものである。視覚に訴えるところの数は矛盾を含むが故に、思考によって把握される、矛盾を含まない可思的な数に向わしめる算術は現象の世界から常住不変の実在界へ向わしめる知的訓練に役立つ学科である。[59]算術の次に学習する学科は幾何学であるが、純粋思惟（διάνοια）[60]に役立ち、魂をイデアへと向わしめる。[61]これによって

一切の学術の理解を容易ならしめる効果がある。次に学習する科目は天文学である。天文学の前には二次元の平面幾何学につづいて、三次元の立体幾何学の研究が必要である。天文学においては三次元の立体幾何学のほかに第四の要素、すなわち運動（κίνησις）[62]（φορά）[63]が加わる。天文学を研究する者は肉眼を蒼空に向け、心眼を内方に向ける。知覚を天体に向け、理性（νοῦς）[64]によってイデアを諦観できるように準備教育をするのである。真に天文学の名に価するところのものは、可視的天体の真の運動の状態を研究して、純理論的に究明する数学的科学である。[65]天文学の次に和声学（ἁρμονικά）[66]の研究が必要である。和声学における音の階層と調和は天体の軌道と運動における階層と調和に類似する。ここにおいても数学的科学の原則に従って純理論的に研究されねばならない。これらの学科の研究は、すべて哲学（φιλοσοφία）[67]に入る前奏曲たるものである。[68]

プラトンは哲学をディアレクティケー（διαλεκτική）[69]という語で表現している。ディアレクティケーは純粋思惟（διάνοια）[70]のはたらきによって倦まずたゆまず一切の真実在・イデアを追求して、究極の善のイデア（ἰδέα τοῦ ἀγαθοῦ）[71]に到達するまで止まない研究の方法である。ディアレクティークは真理探究・学問研究の方法（μέθοδος）[72]である。それは特殊な概念から帰納（συναγωγή）して、一般的な概念へと思惟を進める推論法である。帰納においては多くのうちに一者を通観（συνόψις）[73]する能力が要求される。帰納作用は多数の知覚の対象のうから形相（εἶδος）[74]を看取することである。またこれと反対に演繹作用（διαίρεσις）は形相からいかにして多様な特殊個物に顕現するかということを看取するはたらきをなすものである。[75]この帰納と演釈の両作用を併用すること、すなわち、多者をその統一的一者のうちに、一者をそれによって統一される多者のうちに看取するという研究方法は、世界について完全な知識をうるために用いられねばならないものである。ディアレクティケーは、存在の本質たるイデアを看取し、更に進んで一切の存在の第一原理・イデアの源泉である善のイデアを看取するための学である。諸々の事物の特殊的規定たるイデア、一切のイデアの統一原理たる善のイデアは、ディアレクティケーによって開示されるのである。ディアレクティケーの方法によって、諸々の仮説・前提は次第

に廃棄されてゆき、ついに全く仮説のない始源的な原理たる善のイデアに遡源する。善のイデアに遡らない数学的諸科学は臆見より明確な知識を与えるが、原理的な哲学的認識ほど明確な知識ではない。善のイデアに遡って、これを看取しない者はただ臆見（δόξα）[76]をもつだけであって確実な知識を把握しているということはできない。[77]

かくのごとき最高の学を受けるに価する者は、精神的にも肉体的にも青年のうちで最も優秀なる者で、確固たる信念（πίστις）[78]・最大の勇気・最高の美を備え、且つ前述のごとき特殊な学科訓練に耐える資質を具備しなければならない。それがためには学問に対する理解力にすぐれ、強い記憶力、倦むことを知らない情熱、いかなる困苦にも耐えうる心がまえを備え、血統の純良なるものであることを必要とする。以上のごとき素質の者は少年時代に選ばれて、準備学科として数学的諸科目が授けられる。[79]

初等教育を修了した後、20才に達するまでの二・三年間は専ら体育に力がそそがれる。この間は知的活動を休止する。身体の疲労が激しいので、学問することが不可能であるからである。また体育は決して軽視すべきものではないからである。20才に達して、最優秀者たるゆえをもって多数のうちから選ばれた者は、更に10年間数学その他の学科の研究に従事する。少年時代に無秩序に授けられた諸々の知識は、組織的・統一的・比較的に研究されることが必要である。最後に、諸々の学が有機的一体をなすという認識に達する。この境地に到達できる人こそ真の哲人・ディアレクティコス（διαλεκτικός）[80]である。[81]かかる組織的統一研究能力を最高度に具え、学問においても戦争その他の国家に対する義務履行においても、優秀なることを顕示した者は、30才に達すれば、ディアレクティコスたるの天禀の有無が試験され、イデアそのものを追求しうる者が選ばれる。ディアレクティケーの学習に選ばれた者は、30才から35才まで5ケ年間専心学問研究に身を献げる。次の15年間は、政治や社会生活の実務の経験を体得する。この間、実社会において国家・社会の実務に身を委ね、時には軍隊を指揮し、あるいは、壮年者に定められたあらゆる官職につき、実務の上においても、学問においても、人後に落ちないように修練する。これは、社会における種々の誘惑に対して、よくこれに抵抗しうるか否かを試す機会であ

る。かくしてあらゆる試錬に堪え、実務においても、学問においても、抜群の成績をあげた者のみが、最後の目標である哲人政治家となることができるのである。[82] 永年の準備教育を終えた彼等は最高の知識たる善のイデアを諦観するために哲人統治者（φιλόσοφος-βασιλεύς）[83] のうちに加えられ、ディアレクティケーの研究に専念する。かくして、一切の知識の源泉たる善そのもの[84]（ἀγαθὰ τὰ αὐτά）・善のイデアを諦観することのできる人達は、善のイデアを範として、自己の魂を純化し、国家を有徳にし、国民を教化することに努め、一定の順位に従って国家統治の大任を果すのである。[85]

註① Jaeger, Paideia Ⅰ, P.107.

② Gorgias, 483e.

③ Protagoras, 322b, 323b.

④ Nomoi, 788d.

⑤ Ibid, 785a.

⑥ Ibid, 772c.

⑦ Ibid, 771b.

⑧ Politeia, 461e.

⑨ Ibid, 310b.

⑩ Ibid, 459e～460a.

⑪ 出産の女神

⑫ Politeia, 457b, 458e, 546ab.

⑬ Ibid, 412b.

⑭ Ibid, 439d～440a.

⑮ Ibid, 403c, 410c, 411e, 498b.

⑯ Nomoi, 788b～790a.

⑰ アポロンの姉

⑱ Politeia, 613b.

⑲ Nomoi, 765d～766a.

⑳ Politeia, 410b～411a.

㉑ Ibid, 412b.

㉒ Ibid, 514ab, 515a～c.

㉓ Ibid, 398d～399a.

㉔ Ibid, 398d, 399e, 410a.

㉕ Ibid, 510d, 511a～c.

㉖ Ibid, 524c, 525a.

㉗ Ibid, 522d.

㉘ Ibid, 524a.

㉙ Ibid, 375d.

㉚ Ibid, 522e, 525d, 526a.

㉛ Ibid, 427b, 528a, 531d. *θεὸς ἀεὶ γεωμετρεῖ.*

㉜ Ibid, 374d, 376c, 412b. Auxiliaries of Rulers.

㉝ Ibid, 376b, 474d, 480a.

㉞ Ibid, 545c, 547a.

㉟ Ibid, 508e.

㊱ Ibid, 504e.

㊲ Ibid, 526c, 527c.

㊳ Ibid, 427c, 458a, 509d, 533e.

㊴ Ibid, 528e.

㊵ Ibid, 527d.

㊶ 528e, 529c, 530c.

㊷ *ψυχή* のうちに存する *λόγος* のはたらきを指す。

㊸ イデア（*ἰδέα*）を指す。

㊹ Politeia, 428b, 518e.

㊺ Ibid, 382a, 518c.

① Sun —— Idea of Good.

② Light —— Truth.

③ Objects of Sight —— Objects of Knowledge.
(Colours) (Ideas)

④ Seeing Subject —— Knowing Subject.

⑤ Organ of Sight —— Organ of Knowledge.
(Eye) (*νοῦς*)

⑥ Faculty of Sight —— Faculty of Reason.
(*ὄψις*) (*νοῦς*)

⑦ Exercise of Sight —— Exercise of Reason.
(*ὄψις, ὁράν*) (*νοῦς*, ie. *νόησις, γνῶσις, ἐπίστήμη*)

⑧ Ability to see —— Ability to know.

㊻ Politeia, 510b, 511d.

㊼ Ibid, 342c.

㊽ Ibid, 477e, 511b.

㊾ Ibid, 518e, 582d, 607a. *θεοῖς λόγος*

㊿ Ibid, 525a.

(51) Ibid, 510d, 511a.

(52) Ibid, 509a, 527b. Menon, 98a, Gorgias, 465a.

(53) Politeia, 425c, d.

(54) Ibid, 602d, 603a.

(55) Ibid, 474d, 480a.

(56) Ibid, 475b, 490ab.

(57) Ibid, 428b, 442c, 443e.

σοφία, φρόνησις とも関連してのべられる。

(58) Ibid, 493b. Gorgias,466e, 506d.

(59) Protagoras, 318e. Euthydemos, 290b. Theaetetus, 145a.

(60) Politeia, 510a, 511d.

(61) Sophistes, 263e, 264a.

(62) Politeia, 380e, 530c.

(63) Parmenides, 138b. Nomoi, 893c, Theaetetus, 181c.

(64) Politeia, 506c, 508c. *νοῦς, νόησις, διάνοια.*

(65) Gorgias, 451c. Phaedrus, 270a.

(66) Politeia, 530d, 531a.

(67) Ibid, 403c, 552a, 548b.

(68) Mohl, Geschichte der Staatswissenschaften, s,171.

(69) Protagoras,329ab, 335ab. Politeia, 531d, 540a, 510b, 511e, 531c.

(70) Politeia, 510d, 511ad.

(71) Ibid, 505a, 508e, 534c, Die göttliche Ursache.
Nomoi, 965c. *μίαν ἰδέαν.*

(72) Menon, 74d, 75a, 77b. Phaedrus, 27cd. Politeia, 435d, 504b, 510bc.

(73) Politeia, 537c.

⑭ Ibid, 476a, 511c, 596a.

τέτρατα εἴδη ἐν τοῖς φθόγγοις.

⑮ Phaedrus, 266b.

⑯ Politeia, 340c, 361b. Phaedrus, 260a, 262b, 272d, 274c, 275a.

⑰ Bosanquet, A Companion to Plato's Republic, P.230.

⑱ Politeia, 601e.

⑲ Ibid, 536e.

⑳ Ibid, 531d.

㉑ Menon, 75cd. Gorgias, 447c, 448cd, 449b, 453bc, 454c.

㉒ Politeia, 474b, 475b, 486a, 484ab, 497d, 498ab, 499c.

㉓ Ibid, 473c, 449a, 472e, 479d, 487b, 492e, 502a, 576b.

㉔ Ibid, 527b, 561d, 581b, 582e.

㉕ Ibid, 539b.

第3章　イデアと教育

イデアとはいかなるものであるかの意義を把握することは最高の学問（*μέγιστον μάθημα*）①である。それがためにはいかなる努力をしても十分とはいえない。そしてその終局の対象は善のイデア（*ἰδέα ἀγαθοῦ*）②である。「あらゆる魂がそれを追求し、それがためにはあらゆることを行うもの、これが何であるか(善)を魂は感得はするが、十分にこれを把握することも、確固とした信念（*πίστις*）をもつこともできない③」のである。

プラトンは善のイデアについて、可想界（*νοητὸν*）④にあって思惟に光りを与えることはあたかも可視界（*ὁρατόν*）⑤における太陽のようなものである。太陽そのものを見ないけれども、すべてのものを太陽の光りのもとにおいて見るように、われわれは善そのものを考えないが、すべてのものを善の光りのもとで考える。可視界において太陽が視られるものに対する関係は、可想界において善のイデアが考えられる対象に対する関係に似ている。究極的な存在である善のイデアの光りが照らすものに対して魂が向けられるとき、魂は理性（*λόγος*）⑥

によってこれを認識する。

太陽は事物に対して見られる能力を与えるのみならず、事物に対してそれの存在を可能ならしめるごとく、善のイデアは認識されるものに、それが認識される性質を与え、それの存在が可能ならしめる。善のイデアは他のすべてのイデアの彼方（ἐπέκεινα τῆς οὐσίας）⑦にあって、それらの存在を可能ならしめている。而してイデアとは何であるか、永遠の超越的存在とは何であるか。それはすべての存在の原型（παράδειγμα）⑧として一切の生成を超越した本体（οὐσία）⑨の世界にある、すべての存在の本質的・普遍的存在である。

イデア界は天界の場所（ὑπερουράνιος τόπος）・叡知の場所（τόπος νοητός）⑩である。「それは色なく形なく触れることのできない真にある実在（οὐσία）であり、魂の舵取りである理性（νοῦς）によってのみ観られるものである。……理性は魂のうちにある神のこころであって、神のこころは正しさそのものを見、美そのものを見、真そのものを見る。かかるそのものの知識が実在の知識であって、他の感覚的な臆見（δόξα）⑪のように他のものに変わるようなものではなく、真にあるもの（真実在 ὄντως ὄν）⑫に関する知識である。⑬イデアは実在そのものであって、「実在そのものはすべてのものに本質的な性質、美そのもの、真そのもの、正そのものである。⑭」「真にあるものは常にあるものであって、生ずることもなく、滅することもなく、増すこともなく、減ることもなく、美そのものであって、美しい顔としてあるのではなく、美しい手としてあるのではなく、ある形を具有するものとして、これを見る人々の前に現われるのではなく、また或る言葉とか知識として現われることもなく、それは常に美そのものとして、ひとりで同一形相（ταὐτόν）⑮で存在するものである。⑯」

人生において、この時間空間を超越して実在する存在そのものにふれることにおいてこそ、いかなる場合にもまさって生き甲斐があるのである。人間が実在界を望み見て、存在そのものを理性で認め、実在そのものとともにあるとき、ただこのときにおいてこそ、徳（ἀρετή）の影像（εἴδωλον）ではなく、真の徳（ἀρετή ὀρθή）を認め、これを身にうけ、神の友となることができる。もし人間が不死（ἀθάνατον）⑰になりうるものとすれば、かかる場合にのみ不死となることができるのである。⑱」

かくしてプラトンにおいてはイデア界と感覚界、実在界と生成界、本体界と現象界の二つの世界の断絶（τρῆμα）が考えられる。しかしてこの二つの世界の分離（χωρισμός）はいかにして関連づけられ克服されることができるであろうか。現象界に存在するもののイデアに対する関係は、現象物のイデアへの関与（μετέχειν）[19]として考えられる。かかるイデアへの関与によって一般に現象物は存在しているのである。また現象物に対して、イデアが断絶をのり越えて現存（παρουσία）[20]するか、或いはイデアが分離を克服して現象物を占有（κατὲχειν）[21]することであると解することができる。プラトンはこれを比喩的に表現してイデアを原型（παράδειγμα）[22]として現象物はイデアを模倣（μίμησις）[23]して存在しているのであるとする。

プラトンはイデアを表現するのに形相（εἶδος）[24]、種（γένος）[25]、実在（οὐσία）[26]、単一性（μόνος）[27]、形式（μορφή）[28]、同一物（ταὐτόν）[29]、真実在（ὄντως ὄν）[30]、それ自体（τά αὐτόν）[31]等をもってしている。またイデアの種類について同一性（ἰσότης）・同等性（ὁμοιότης）[32]で表わし、種々のイデアが存在するが、それは現象的として存在するものだけのイデアがあるのである。そして善のイデアはすべてのイデアに存在性を与える原動力としてのイデアであり、すべてのイデアを統一し、すべてのイデアの目指す目的としての存在である。[33]イデアは我々の感覚的な知覚から引き出されるのではなく、感覚的知覚を起縁として把握されるのである。数学においては見える固形を使用するのであるが、思考の対象はこれらの固形ではなく、その固形の原型となっているところのもの、すなわち固形そのもの、正方形そのもの、三角形そのものなのである。固形は形象として、そのものの模像であって、この形象の助けをかりて、思考の働きである悟性（διάνοια）[34]の能力によって、そのものを認識することができるのである。われわれが絶えず生成変化する感覚的な知覚に対してこれを起縁として、悟性の思惟によって、時間や空間を超えて存続するものを認識することのできるのは、このものが既にわれわれの魂のうちに存在しているからである。感覚的な知覚は a posteriori な経験的なるものであり、時空を超えて存続するものは a priori なるものである。このことはメノン篇において詳しくのべられている。[35]アポステリオリなる感覚を通してアプリオリなる原理を認識すること

をプラトンは想起（ἀνάμνησις）[36]という語で表現している。想起とは既に魂のうちに先在するものを発見することを表わすのである。すべての映像（εἴδωλον）は時間・空間の経験に依存している。映像を起縁としてあらわれる真にあるものは時間も空間もないアプリオリな原型[37]である。すなわち時間・空間において存在するものは永遠に動く映像である。

更にプラトンはティマイオスにおいて、イデアを万物の制作者（大主観δημιουργός）[38]が世界をつくる範型（παράδειγμα）として挙示している。これはカントが先験的な範疇によって意識主体が認識の対象を構成するときに、その範疇がプラトンにおける範型・原型であって、製作者が認識主体（大主観）である。イデアの追求は認識の構成の理論であり、真知（ἐπιστήμη）[39]探究の方法である。[40]真知の探究はある転向（περιαγωγή）[41]を必要とするものである。かかる転向は外から与えられるものによってはおこらない。ものを見るときに目を転向するためには全身の転向がなければならないように、真知への転向は魂全体が生成の世界から存在の世界へと転向しなければならない。理性的な能力は魂の全面的転向によってその機能を十分に発揮できるものである。一般に教育（παιδεία）[42]とはかくのごとく、真知に対して全面的転向をひきおこす術である。

しかし真知への道は段階的に昇りゆくものである。感覚的に知覚されるものから、数学におけるごとき純粋なる思想へ、更に数学的認識としての純粋なる思想から対話的方法によって諸のイデアへ、諸のイデアから一つの善のイデアへと昇ってゆく。換言すれば認識は感覚的知覚（αἴσθησις）[43]から臆見（δόξα）[44]、臆見から正しい臆見（δόξα ὀρθή）[45]へ、正しい臆見から真知（ἐπιστημή）へと進んでゆく。これらの段階は認識の段階であり、知識の段階であり、思惟の深化であり、魂の働きの純化である。現象界における一つの美しい身体から出発して、多くの美しい身体へ、多くの美しい身体からすべての美しい身体へ、そしてすべての美しい身体から美しいものそのものへと昇りゆくのである。美しいものそのもの（αὐτὸ τὸ καχόν）[46]が美のイデアであり、美の本体であり、美の本質である。人間において、正しく生きるためには、生き甲斐ある生き方[47]をするためには美そのもの、美のイデアを認識することが必要なのである。

教育とはこのようにして下の段階のものから次第に上の段階のものへ、上の方からの導きによって漸進的に高い真理（究極はイデア）に達せしめることである。導き（ἀγωγή）によって人間は下の段階から上の段階へと向けられてゆくのである。下の段階の認識である臆見は矛盾に満ちて動揺しているが、それが導きによって正しい臆見となり、更に次第に論理によって固定されて（λόγον διδόναι）[48] 確固不動の真知に達することができるのである。[49] かかる上昇的・漸進的導きこそ教育でなければならない。

新プラトン主義の教育哲学者ナトルプによれば、教育は根本的には人格を完全なものにすることであって、完全になるということは、そのものがあらねばならぬ姿になることを意味する。そのあらねばならぬ姿こそイデーなのである。[50] それゆえにイデーこそ一切の教育の出発点であるということができる。人が成長するということは人の精神の成長することであり、精神がその豊富なる内容を展開することであり、精神が展開をするその中心はイデーである。[51] かくしてイデーが教育の中心である。[52] 教育において、その指導原理である法則は規範であるから、経験からは規範を引き出すことはできないので、規範は超経験的なものでなければならない。[53] 教育の最高の指導原理は超経験的なイデーでなければならない。[54] 精神の最高統一者としてのイデーこそ、教育に当為の法則を与えるものであり、教育の根本原理である。[55] 教育はその原理と規範をイデーに求め、それに基づいて実践されるのでなければならない。

註 ① Politeia, 525b, 534d.

② Ibid, 522a, 579b, 504e, 505d, 509b, 510b, 511b, 534c, 586e.

James Adam, The Republic of Plato, P.492, (1963) に次のごとくのべている。

(1) Supreme auther of the universe.

(2) The goal of all creations.

(3) The ultimate object of all desires.

③ Ibid, 505de.

④ Ibid, 510b, 525d, 527b.

⑤ Ibid, 510a, 514a, 517a, 523c.

⑥ Ibid, 435a, 518e, 519ab, 527d, 572d, 572a, 586e, 588d.

Jamer Adam, Op. Cit., P.514. Reason is the divine element in man and the eye of the soul.

⑦ Politeia, 587b.

⑧ Ibid, 409ab, 472cd. *παράδειγμα* は model, standard.

⑨ Ibid., 476e, 485ab, 490a, 508d, 534c, 582c, 585c.

⑩ Ibid,, 434c 435e.

⑪ Ibid, 499a, 505d, 534c, 480a, 570a, 514ab, 523c.

(1) sense of seeming,

(2) opinion.

⑫ Protagoras, 349b, Charmides, 168d, 169a, 175b, Menon, 72b, 86a.

⑬ Phaedrus, 274c～e.

⑭ Phaidon, 78d.

⑮ Politeia, 487, 330c.

⑯ Symposium, 210e～211b.

⑰ Symposium, 206c, 208b, 212a. Phaidon, 79b, 80ab.

⑱ Ibid, 211d～212a.

⑲ Ibid, 211b. Politeia, 402d, 478e, 585bc.

⑳ Politeia, 437e, 438a. Sophistes, 247a, 248c. Symposium, 211b.

㉑ Politeia, 560d.

㉒ Ibid, 476d, 596b, 597b, *παραδείγμα ἐν τῇ φύσει.*

The relation of idea to particulars, Gorgias, 525bc. Phaedrus, 250ab, Theaetetus, 176b. *ὁμοίωσις θεῷ.*

㉓ Ibid, 392c, 395d, 399a, 395c.

㉔ Ibid, 572c, Symposium, 204c, Phaidon, 104b, Parmenides, 132a.

㉕ Politeia, 435b, *γένη ψυχῆς.*

㉖ Ibid, 382b, 598b, 476e, 485a, 490a, 508d, 534c, 582c, 585c.

㉗ Ibid, 604a. *αὐτὸς καθ, αὐτόν* と同じ。

㉘ Philebos, 12c. Phaidon, 103e, 104b. Timaeus, 50cb, 51a.

㉙ Protagoras, 330c, 360e. Laches, 190a. Menon, 100b. Phaedrus, 247d,

250e, 277b.

㉚ Protagoras, 349b. Charmides, 168d, 169a, 175b. Menon, 726, 86a.

㉛ Symposium, 211c. Politeia, 363a, 472c, 612b.

㉜ Parmenides, 138b.

㉝ Sophistes, 254e.

㉞ Theaetetus, 160d, 170b, 180ab, 189d, 195de. Phaidon, 65e, 79a. Symposium, 219a. Politeia, 476d, 500b, 510d, 511c.

㉟ Menon, 82b～85b.

㊱ Politeia, 518c, 592b, 598a, 612a. Menon, 86a.

㊲ Timaeus, 87d.

㊳ Sophistes, 265c. Timaeus, 28a, 29e, 37c. Philebos, 27b. Politicus, 270a, 273b. θεὸς δημιουργῶν.

㊴ Menon, 85e. Gorgias, 454c. Symposium, 203c～e. Politeia, 503e, 504d, 505a. Philebos, 16c, 18d.

㊵ Timaeus, 28a.

㊶ Politeia, 518cd, 521c.

㊷ Ibid, 376e.

㊸ Ibid, 524a, 490b, 523c, 524b. relation to opinion, it stimulates reason. (Politeia 523c, 524d.)

㊹ Ibid, 499a, 505d, 534c, relation to opinion (476c, 480a, 510a, 514ab.)

㊺ Ibid, 430b, 506c, 619c.

㊻ Protagoras, 330c, 360e, Laches 190a. Menon, 100b. Phaedrus 247d, 250e, 277b. Symposium, 211c. Politeia, 363a, 472c, 612b.

㊼ Symposium, 211cd.

㊽ Politeia, 500c, 510c, 531e, 533e, 534b.

㊾ Epistulae Ⅶ, 343d.

㊿ Natorp, Sozialpädagosik, S.5. (1904)

(51) Natorp, Philosophie und Pädagosik, S.3.

(52) Op. Cit., S.14.

(53) Ditto, S.90.

(54) Ditto, S.72.

㊺ Osward Kroh, Theorie und Praxis in der Pädagosik, S.27.

第4章　エロスと教育

教育（παιδεία）はエロース（ἔρως）を媒介として、導びかれるものと導びくものとの間における共同の生産である。それは教育的に生産をうけた子供(παιδός)に関して導びかれる者と導びくものとの友愛(φίλια)①として考えられるのである。かくして教育と生産と友愛とは密接不離のことがらである。換言すれば教育愛と生産愛と友愛とは同一のことがらであるということができる。しかし教育愛は単なる生産愛ではなく、それは滅すべきものが不滅のものに憧がれてあらゆる方法をつくして行う生産愛である。

「愛のことがらに向って正しい道を進もうとする者は若い時から美しいものを追求せねばならない。更に指導する者の指導が適切であれば美しいからだのうちに美しい思想を生み出すようになるのである。魂の美は肉体の美よりも遙かに高いものである。結局は魂さえすぐれておれば、どんな人でも満足してこれを愛するようになるのである。教師は若者をかかる方向へと導かなければならない。これが学問的認識の方法である。②

エロースは最高の美の認識にまでかり立てる教育・学問的認識の原動力である。肉体的のものから精神的のものへ種々な生産活動をしながら、段階的に美のイデアにまで昇ってゆくのである。エロースは生産の働きであり、他のものによって導かれて生産するところのエロース的生産の働きである。教育は個としての生産愛より更に種族としての生産愛、すなわち教育愛にまで発展しなければならない。エロースの真義を理解すること（τὰ ἐρωτικά ἐπίστασθαι）はかくのごときエロースのもつ意義を認識することであって、これが教育の本質の理解であり、また最も純粋なる教育愛である。一般的に理解されるごとく先だつものがおくれたものへ、熟達した者が未熟なものへの救済・指導・教授活動というよりも、教育にはもっと本質的なことがら、すなわち若者のうちにある美しいもの・善いもの・正しいものへの根源的衝動を見出し、その衝動を看

取して人間を愛するという人間中心の契機が存在する。③

エロースの愛は一般的な愛・アガペー（ἀγάπη）より更に高く深いものである。④アガペーの愛は生産の愛ではなく、あるものに対する非価値的な愛である。エロースは美しいもののうちにおいて生産せんとする愛である。⑤美において生産せんとするエロースの働きは見える美においてのみならず、見えないものにおいても美なるものを見出して、その美において生産せんとするものである。エロースは創造と生産の喜びに満ち、美しいものの光りを現在の上にひろげながら、美しいものを創造するのである。それは価値的・生産的な愛である。アガペーにおいては、不美は不美としてそのままにしておいて、そのうちに美を創造することなく、愛するというのがエロースと異なるところであり、それが教育的な愛でない所以である。エロースは不美のうちに美を見出して、美を創造して愛するという教育愛である。

不美を不美のまま愛するという立場と不美でも美として愛するという立場について見るに、前者は不美はどこまでも不美であるが、それでもそれを愛するのであるから、不美と愛との対立が感ぜられるのであるが、後者は不美が美として愛されるのであって、不美と愛との間に対立が感ぜられないのである。愛の働くところにおいてはすべて不美は解消されるのである。愛しても不美はどこまでも不美であるというのがアガペーであり、愛する限り不美も美であり、敵も敵でなくなるという愛そのものを人間の基調として考えるところに、プラトンにおけるギリシア的ヒューマニズムの特性が見られ、これがエロース的愛である。

次に友愛（φιλία）はエロースのもつ教育的な状態（ἕξις）⑥と考えることができる。フィリアは教育的愛の現象であり、教育的な状態である。それはエロースの教育状態である。教育は、それが共同生産である限り、導くものと導かれるものとの間における上下の関係においてなされるものではなく、授けるものと受けるものとの関係でもなく、同じく死すべきものであり、同じく理性的存在者・ダイモーン（δαίμων）⑦的であり、同じく生産者である人間の共同生活（συζῆν）⑧からのことがらとして考えられる。教育は与えられるものでも受けとられるものでもなく、導びくものと導びかれる者との間の友愛にあふれた交わ

りによって生まれるものである。それは教師のものでもなく、生徒のものでもない、これらの両者をつなぐ絆であり、両者の魂のふれ合いから生まれた子供であるということができる。これについて、プラトンは「そばにいても、離れていても彼はその人のことを思い、生れ出たものを、その人とともに育てる。その結果、こういう人々は親しい共同の念と強い友情によって結びつけられる。[9] 友情によらないとどんな教育も生産的でなく、生産的でないどんな情熱も教育愛ということができない。[10]」とのべている。

かくして滅ぶべきものはこうした仕方で不死にあづかるのである。「かくして滅ぶべきものは教育によって維持されてゆく。神的なるものは徹頭徹尾同一不変であるが、教育は去りゆく者・老いゆく者が、自らありしごとき若者を後に残してゆくことによって維持されてゆくものである。[11]」

エロースはシムポジオンにおいて永遠の中間者（μέταξις）[12]として説かれ、神でも人間でもない神と人間との中間者としてのダイモーンと名づけられた。

エロースは真実のフィリアの基礎である。それゆえに教育活動はエロースから発するフィリアとして語られている。「エロースのゆえに彼女のフィリアは他の者のそれを凌いでいる[13]」とのべている。人間はエロス的である故に、すなわち、中間的であり、且つそれ故に究極的なもの、永生的なものを求める本性によって、教師と若者との協同・友愛に導かれる。それが教育活動である。エロースは元来種族的永生への衝動を意味したものである。エロースとフィリアはソクラテスの教育概念であり、ソクラテスもプラトンもエロースとフィリアに生きた人であった。

プラトンにおけるエロースは無知の知を超えて知に至る手段としての思考であり、イデアに結びつけるように人間の魂に働きかける真理探究の絆であり、イデア伝達の媒介者であり、あらゆる一時的暫定的なものに甘んぜず、いちずに継続して永遠なるものに思考を向けてゆかんとする働きである。エロースは知を愛することであり、知を愛することは知を認識することである。知が教えられるということは、愛することによって生ずる働きである。プラトンの愛知はすべての高貴なるものに対するエロースとなったのである。エロースはひたすら全生命力を傾けて一つのものに注がれる働きであって、中途半端なもので

あってはならず、まためざすものが多様であってもならず、あくまでも一つのものに純粋に傾けられた魂の働きである。エロースのめざすものは高貴なるものである。哲学的思考は求めるものと求められるものとの間にとび交う火花である。エロースの火花は両者の媒介として、照明の働きとして、情熱の働きとして、あこがれをうつす鏡でもある。⑭

エロースの思想は既にパルメニデースに発している。彼は「すべての神々に先達ってエロースが生じた」とのべている。⑮

エロースは人々にとって最も偉大なる善行の創造者であり、個人生活においても、国家生活においても、エロースのみが人間に神の力を吹きこむものであって、他のもののために自己を犠牲にするほどの決心をおこさせることができるのである。⑯ エロースこそ徳をめざし徳を吹きこむ働きである。⑰

かくのごとくエロースは偉大なる神であり、人々と神々のうちで最も驚異に価するものであり、最も貴いものであり、最も古く、エロースの両親はなく、しかもそれ自身は出生の神である。⑱ ヘシオドスは、「最初に混溷（Xáos）があって、神々の永久の坐として土地の上に最初にエロースが生じた。⑲ 混溷の後に二つのものが生じた。それは土地（γῆ）とエロースであった。」⑳とのべている。

註 ① Apologia, 19e, 33ab. Protagoras, 319a, 324ab, 327e. Menon, 89e, 93b, 94e. ἀναμνηστὸν=διδακτόν 82a, 87b.

② Symposium, 210a～d.

③ Phaedrus, 257a. Symposium, 211d, 212a. Politeia, 402e, 403c. als Liebeskunst, 教育は ἔρως であり φιλία である。

④ A. Nygren, Eros und Agoge, I,S. 157.
F. Copei, Fruchtbare Moment im Bildungsprozess, S.19ff.

⑤ Symposium, 206e.

⑥ Politeia, 433d.

⑦ Ibid, 469a, 614b, 617de.

⑧ Ibid, 436c.

⑨ Symposium, 209c.

⑩ Xenophon, Memorabilia, II, VI, 21.

⑪ Symposium, 208b.

⑫ Politeia, 498a. Symposium, 179c.

⑬ Symposium, 179c.

⑭ Ibid, 203e.

⑮ ''Γῆν τε καὶ Ἔρωτα', Symposium, 178b.

Πρώτιτον μὲν Ἔρωτα θεῶν μητίσατο πάντων Ibid.

⑯ Ibid, 179b, 180b.

μένος ἐμπνεῦσαι ἐνίοις τὸν θεόν,------ Ερως τοῖς ἐρῶσι παρέχει γιγνόμενον παρ, αὑτοῦ.

⑰ Ibid, 182d.

⑱ Ibid, 178b.

μέγας θεὸς εἴη ὁ Ἔρως καὶ θαυμαστὸς ἐν ἀνθρώποις τε καὶ θεοῖς, πολλαχῃ -------- κατὰ τὴν γένεσιν. Τὸ γάρ ἐν τοῖς πρεσβύ τατου εἶανι τὸν θεὸν πίμιον.

⑲ Ditto, μετὰ το χάος δυο τούτο γενέσθαι.

⑳ Ditto.

第5章　対話法と教育

プラトンは実在と生成（γένεσις）①との分離（χωρισμός）②について、両者の関係がないのか、それとも両者の架橋が可能であるのかの問題を提出する。この問題を解く哲学的方法（διαλεκτική）③を対話と名づけた。対話法はより高い認識をめざす人間の思考の方法である。彼は対話法を最高の学とのべている。「対話法は人が目やその他の感覚的知覚を離れて、真理とともにあるもの、そのものへと進んでゆくことができるかどうかを吟味する試金石④である。」「対話法はあくまでもかわることのない存在者をめざしている。⑤」「他のすべての能力と知識は獲物のようなものである。その使用は対話家にゆだねられるべきである。⑥」「対話法は学問建築家の冠石のようなものであって、ここではすべ

ての学問の極致が達成されるのである。[7]」たとえそれが術知であっても対話家（διαλεκτικός）[8]の術知（τέχνη）[9]は他のすべての術知にまさって正しく、すべてのことがらに精通するものである。[10]すなわち、対話法は帝王的な学（βασιλική ἐπιστήμη）[11]であり、それは支配者（ἄρχοντες）[12]のものである。[13]思考の上昇や存在そのものの体得において、対話法はすべての一時的な固定性を克服し、開かれた空間のうちを思想が自由に飛びまわり、その飛遊を通じて存在の根拠を追求し、追求する問題を止揚しつつ深奥なる根源にふれるものである。[14] (Parmenides, 132b: μὴ τῶν εἰδῶν ἕκαστον η τοῦτων νὸημα, καὶ οὐδαμοῦ αὐτῷ προσήκῃ ἐγγίνεσθαι ἄλλοθ, ἤ ἐν ψυχαῖς) かくのごとく対話法は上昇する思考であると同時に実在そのものに対する思考である。それは思考を駆り立てる働らきであり、その思考において周行しつつ省察を深めてゆくものである。[15]思考の働らきは対立によって火を発するのである。感覚的に知覚されたものを考えようとすれば、直ちに矛盾が生ずる。その矛盾は火打石（τιευρεῖα）[16]のように互にこすり合って認識において探究されて知識をもたらすものである。[17]笑うべきもの無しに、真面目なるものを、反対のものなしに、そのもの自体を学ぶということはできないものである。[18]高貴なものを認識しようとすれば、高貴でないものを知らなければならない。勿論高貴でないものに影響を許してはならないが、無学からのがれるためには我々は知らなければならない。徳と悪徳との両者は認識にとって必然的に欠くことのできないものであり、全存在の領域にとって誤謬と真理とは同時にまた相互に結び合って疲れを知らぬ努力によって認識されねばならないものである。[19] (ἅμα γὰρ αὐτὰ ἀνάγκη μανθάνειν καὶ τὸ ψεῦδος ἅμα καὶ ἀληθὲς τῆς ὅλης οὐσίας.)

対立はすべての感覚的な事物において生成の世界のいたるところ、互に結びあっている。しかしそれらは互に排斥し合う。反対に対置されたどんなものでも、それらから新らしいものが生ずるのであっても、反対そのものだけでは決してそのものの反対に変わりゆくものではない。[20]このことは単に感覚的に対立的なものだけでなく、イデアそのものさえも対立をもっている。感覚界でも、イデア界でも、対立そのものによってより高い、より深いところへと突入するためには、対話法は必要欠くべからざるものであって、対話法によってのみ思

考が深化されるのである。それを媒介として知識の認識が可能となるのである。[21]対話法における矛盾性は深い思考を刺戟する契機である。矛盾性はすべてのことがらの発展する契機である。ここにヘーゲルの弁証法の萌芽が発見されるのである。それは理論家をして、考えるあらゆることを解いて、対話によって更に高い綜合統一へと導びく契機となるのである。存在するものはすべて相対立して牽引力をもって発展するということは既にヘラクライトスにおいて説かれたところである。[22]ただ多くのものを寄せて進めるということは、あることがらの探究において何等の認識を生むものではない。すべてのことがらにおいて、そのものの本質の把握は綜合諦観（συνόψις）[23]において、はじめて行われるものである。一般に認識せんとする者は存在するものを多くの知覚から一つのものとして悟性（λογσμός）[24]を通して綜合する（σύνθεσις）[25]ことによって、形相（εἶδος, ἰδέα）[26]としてとらえられるのである。[27]

対話法においてはばらばらになっているものを一つの紐帯（δεσμός）によって説明するとき、それらのものを媒介（μεταξύ）するものがある。この媒介者は分離しているものを媒介して結合させる働らきをする。すなわち、現象において現在するものをイデアに関与（μετέχειν）[28]せしめる働らきをする。また実在する形相は運動のない硬直さに固執することができないで、現象に現在（παρουσία）[29]し、それを占有（κατέχειν）[30]することによって現象と結合するのである。完全にあるものは実際に運動も生命もない枯涸のものであるということに納得することができない。[31]常に自（αὐτός）[32]と他（ἕτερον）[33]、一（ἕν）と多（πολλοί）限度（πέρας）[34]と無限度（ἄπειρον）[35]を結びつけるもの、包括するものが求められねばならない。これが媒介者である。互に矛盾するものは運動をひきおこす契機となり、対立を媒介するものができて、両者の間の牽引力となるのである。それらのものの分割（διαίρεσις）[36]と綜合（συνοπσίς）[37]（συναγωγή）がすべてのことがらを秩序づけ、すべての概念を系統づけて、概念のピラミッドに整序するものである。[38]対話法によって得られたものは確実（ἀσφαλής）で明晰（διαυγής）で理性的な洞察力（παρατήρησις）となるのである。対話法は術知や技術よりも純粋に概念的な、超感覚的なものをめざすものである。それはまた魂の浄化（κάθαρσις）（καθαρμός）[39]とも考えられるのである。パス

カルのいうごとく考える輩である人間にとって対話法は真の知識（ἐπιστημή）[40]をうるための方法（μέθοδος）[41]である。かくのごとく、対話は概念の多様性を統一し、恣意的な考え方に陥ることなく、多様性を支配して、思弁的に真知を把握する思考の方法である。個々の多くのものを見て、これらのものの間における共通性（κοινός）[42]の綜合諦観できる者が対話家（διαλεκτικός）[43]である。[44]綜合諦観の真理は常に前述せるごとく、分割の明晰さによって先行される。分割を通しての綜合諦観である。それ故に、分割こそ対立において考えられるものを認識するための第一条件である。分割（τάξις）・類（τρόπος）・種（γένος）等は綜合諦観するための、人間の認識にとっての人間に対する神の贈物（δῶρον）である。[45]分割があってはじめて綜合、統一へと導びかれるのである。認識（γνωρίζειν）[46]とは相互の間に存する共通のもの（κοινωνία）[47]を洞見することによって、相互のものの構造が明らかになり真知に達することができるようにするものである。思惟（νόησις）[48]する者は共通のものである形相（εἶδος）の世界まで昇ってゆかなければならない。[49]

数学者は目に見える図形を導びきの綱としながら悟性（διάνοια）[50]の活動によって、眼に見えないものを正確に把握するとき、必ずある前提から出発する。その前提は常に何等の証明を要しない自明のこととして通用するのである。それ故にその前提を超越することはできないのである。[51]対話法は形象（σχῆμα）[52]を用いず、ただ概念だけに支えられて、あらゆる前提を超えて、前提のない始源をめざして進む。思惟は前提のないものへと前進して、全体の真の始め（ἀρχή）[53]に達するために、これに関連するすべてのものを確保しつつ、感覚を用いずに、概念そのものだけで進んでゆくのである。かくてプラトンは、人間の能力における、どこまでも進んでゆく高い可能性を認め、人間知や人間能力の訓練を説き、かかる思考によって、人間の理性の働きによってその魂を浄化して、正しく確実にものを認識し、真知（ἐπιστήμη）[55]に至らしめるのである。イデアは直接には教えられないが、対話法による思考によって浄化された魂（ψυχή καθαρός）[56]に対して現出させることができる。照明（λάμπων）[57]、すなわち、真理のかがやきは、善のイデアに照らされて、種々のイデアを見ることができるのである。

弁証法、すなわち対話法（διαλεκτική）[58]はプラトンにては、人間には最も高い学問、本来の意味における哲学である。あらゆる段階的に行われる国家試験に合格した最優秀者が30才に達して研修することが許されるのである。「人は幼い時から正しいこと、美しいことを学び、それを尊敬し、それに服従するように育てられてきているわけであるが、美とは何か、正義とは何かと質問されて、彼等の答えに対して反駁されて、美と考えていたものが、不美と思うようになり、正と考えていたことが邪と考えるようになることは危険なことである。対話法は、よく選ばれた、ロゴスにたずさわる者が30才になって、はじめてこの道に入るのでなければならない。[59]」

ソクラテスやプラトンは学者(知識の所有者)でなく、真理（真理 ἐπιστήμη）[60]の探究者、すなわち、愛知者（φιλοσοφός）[61]であった。国家論に見る、プラトンの描くソクラテスの姿は全く愛知者そのものである。更に彼は単に愛知者であり、真知の探究者であるのみでなく、真知の探究者の友であり、指導者(教師)であり、訓練された学者、すなわち、対話家（διαλεκτικός）である。[62]彼こそ、人々とイデアを媒介する真知への教師であり、国民の教師である。

しかし、教育を愛知において、教育される者の友として考える態度から、更に、積極的に、被教育者を指導することであると考える態度は、プラトンの法律論においてはっきりと現われている。教育とは法（νόμοι）[63]によって正しいとされ、また年長者で、経験豊かな、最もすぐれた人の正しいと認めたロゴスに向って児童を導くことである。[64]エウェソスの哲人ヘラクライトスの教説の中心をなすものはロゴス（λόγος）[65]であり、ロゴスは多異の統一をなす働らきを有する。[66]互に対立するものを統一において、調和・緊張（σύντονον）をひきおこすことは、哲学者・対話家の特質である。魂におけるロゴスによる多異の統一は無限の高揚をめざして進み、同時に内的深化が行われるのである。ロゴスは共通であり、ロゴスは魂に内在して、原初的綜合統一（urkoinzidenz）する働らきをもっている。共通するものこそ、すべてのものをのりこえてゆく、調和統一の働らきをもつことができるのである。[67]対話法はイデアを綜合諦観するための学である、それは仮定（ὑποθέσις）[68]のない原理に向わしめる方法である。[69]対話法の中心をなすものは愛知（σοφία）[70]である。愛知とは、知識に対する愛慕

(ἔρως) である。愛知は教育にとって最も大切なるものであって、人間を真理に向ってかり立てる働らきを有するものであって、この働らきの源泉はエロースである。愛知者は知者でも無知者でもなく、その中間にあるものである。自分の知らないことをよく知って、知らないことを知ろうとする努力をなす人である。[71] プラトンはソクラテスをして、愛知者は全知と無知との中間にあって、エロスの働きによって、真知に達せんと努力する人であるといわしめている。それ故にエロスは人間の教育にとって本質的なる働らきである。

プラトンはシンポジウムにおいて、ディアレクティケーについて次のごとくのべている。「対話法は他の学問のように語ることのできるものではない。それは、むしろ、事柄そのものに没頭する長い間の共同探究の成果とし、突如として飛出す火花によって点ぜられた火のように魂のうちに生じ、かくして、自分で自分を育ててゆくのである。[72]」対話法は共同探究のうちにおいて生ずる話し合いによる研究方法である。それは著作においても、講義においても、満足に伝えられない、得ることのできないものを、対話討究によって、突然に、ある瞬間の閃めきを通して輝やき出ずるようにする教育方法である。著作は体験あるものに対しては知識をよびさますことができるが、それ以外の読者には、知識をよびさますことはできない。著作はいつも同じことをいうだけであって、人が質問をしても沈黙しているのみである。しかし、対話は、言葉によって、学ぶ者の魂が自ら、めざすものに対して、それを求めて働らき、自らの働らきによって魂のうちに真知が現われる方法なのである。[73]「われわれのともに語っていることについて、われわれはお互に、相手が同意し、また反対することを通じて、ともに進むのであるが、その場合にわれわれは、知っていることを語るのではなく、われわれの知らないことを、一緒に探究するのである。この共同探究の方法が対話法なのである。[74]

対話と思考、すなわち、話すこと (λέγειν)[75] と考えること (λογίζεσθαι)[76] とは同じことである。思考とは魂が探究しようとすることについて、自己自身に対して詳しく説明 (ἐξηγεῖν)[77] を求めることである。このとき魂は、或は問い、或は答え、或は賛成し、或は反対する。そして遂に結論に到達するのである。[78] 対話法は真理にいたる道である。対話する者は、その討論において、自分が勝

つであろうか、それとも敗けるであろうかというようなことは全く問題ではない。むしろ、対話する者が、最も真実なるもののために、真知をめざして、互に共同して、戦わねばならないのである。[79] この場合に対話する者が、相手のことを気にかけずに、真理のことのみを気にかけるべきであって、対話者のことなどは問題ではない。[80] 対話の目的は真理（ἀλήθεια）[81] そのものであって、すべて現存するものの本性を明らかにすることは、あらゆる人間の共通の関心ある問題である。勝つことのみを目的とする論争（συζήτησις）と共同性（κοινωνία）[82] を目標とした真理の追求のために骨折る対話とは全く別個のものである。論争は争いのための手段でしかなく、勝つことだけが目的であって、真理探究それ自体を目的とする対話とは全く相反するものである。対話においては、相手をよく理解して、相手の人柄を認めて相手を、それによって、よりよくするのでなければならない。[83]

対話法は矛盾の浄化作用である。矛盾によって、自己の無知を自覚させ、正しい判断へと導びく役目をする。対話によって、自己自身を結びつけている頑固な自己を、かかる思いから解放するのである。かかる解放はあらゆる解放のうちで、最も快よい、最も確実なる解放である。[84] しかし、一旦矛盾が解決して真実なるものに結実すれば、真実なるものは何ものによっても反駁されることはないのである。[85] 矛盾を含んでいる思想や臆見（δόξα）[86] は絶えず反駁されるものである。[87]

ソクラテスの母は助産婦であったので、ソクラテスはディアレクティケーのことを助産術、マイユウティケー（μαιευτική）と名づけたのである。対話によって、人々に真の知識を生ませる媒介をする方法という意味である。対話法は教育の大切な方法であるが、対話法、すなわち助産術は、出産において、妊婦を助けて子供を産ませるごとく、人を助けて知識を産ませる術を意味するのである。[88] しかし、それは肉体における助産術ではなく、それは魂に関するものであり、産まれたものが真実のもの（ἀλήθεια）[89] であるか、単なる映像（εἴδωλον）[90] であるかを識別するという、大切な美わしい仕事なのである。[91] マイユウティケーという語はテアイテスト篇において現われたもので、知識はもともと自己の魂のうちに潜在し、それは自分で生むべきものであって、これを他人に提供

したり、他人からもらったりすることのできないものであるということを意味する。[92]

対話術（διάλογος）とは、人と人との間における言葉（λόγος）を通じて（διά）の交通を意味している。人間は相互に言葉の交通をもって共同活動をしている。特に教育においては、対話は最も大切なものである。知識・真理の認識は対話から生まれる。ここに対話の教育的な意味がある。最高の認識は、あることがらについて、久しい交わり（συνουσία）が行われ、その交わりの共同生活（συζῆν）のうちに、にわかに魂のうちに光りが点ぜられて、真理が認識がなされ得ることである。正しい知識は、かくのごとく交わりと共同生活によって、教える人の助産（μαίευσις）を通じて可能となるのである。[93]

対話法によって、真知の生産（τόκος）[94]、すなわち教育が行われることができる。書かれたものは生きたロゴスの模写（εἴδωλα）[95]にすぎない。それは問うことも答えることもできない。[96]書物は人々に死んだロゴスを与えることができても、真知を生産させることはできない。これに対して、対話によって助産することによって、生産的・創造的である、生きたロゴスを学ぶ者の魂のうちに彫りつけることができる。[97]対話という問いと答えとの交わりにおいて、人と人との接触によって真知が生産されるのである。ソフィストのやったような雄弁宏辞は人々の耳を喜ばせ、拍手喝采をひきおこし、話す人の虚栄心と聴く人の情意を満足させることはできるかも知れないが、却って人々に臆見（δόξα）[98]を助長し、知性（σοφία）[99]を眠らせることになる。プラトンにおいては人間が人間になし得ることは、与えるということではなく、感動させるということでもなく、ただ交わり（κοινωνία）[100]を通じてエロース的探究の意欲を目ざめさせ、真知（ἐπιστήμη）[101]の出産を助産することなのである。真知の出助は決して教授や講義によってではなく、共同の研究（κοινῇ βουλεύεσθαι）[102]によってである。それ故に、教え導びく人と交わる、教え導びかれる人を生徒（μαθηταί）とせずに、仲間（συνόντες）[103]と呼ぶことにしたのである。プラトンの師ソクラテスが市民を教育して、国家内に善い種子を改良しようとしたのに、愚民達は、ソクラテスが雑草をひきぬく人間であるかのように考えた。それ故に、彼等はソクラテスの助産術に気付かずに、彼を人々を悩ますことに興味をもつ奇妙な人

間であると非難したのである。[104]

助産術は二つの部分からなり、一つは心のうちに陣痛をおこさせる働らきとしての論破（ἔλεγχος）[105]であり、他は出産の助力としての助産（μαίευσις）[106]である。論破は正しいか、正しくないかを吟味することをいうのである。ソクラテスはこれをもって当時のアテナイの人々を改善せんとして徹底的に論破したのである。このことが彼をして毒杯を仰がしめたのであった。何事も吟味されないような生活は、生きるに価しないものであると考えた。しかし、この吟味主義（ἐξετάζειν）[107]こそ助産術の本質であり、教育の源泉でなければならない。吟味において人々はゆきつまり（ἀπορία）[108]に陥るのである。吟味とは、無知な人間を、知らずにいながら、知ったつもりでいる状態から救い出して、無知を自覚せしめ、真知を探究する生産的な状態に導びくことである。かくして、吟味こそ助産術・対話法において、児童の教育において最も重要なことがらである。[109]

註 ① Politeia, 4856b, 409b, 519ab, 525b,526e, 546a.

② Ibid, 476a.

③ Ibid, 531d, 511e, 5 31c, 534e, 537d, 540c.

④ Politeia, 537d.

⑤ Philebos, 58a.

⑥ Euthydemos, 290c,

⑦ Politeia, 534e.

⑧ Ibid, 504e, 601d.

⑨ Ibid, 493b.

⑩ Philebos, 58a.

⑪ Charmides, 168a.

⑫ Politeia, 412b, 429b, 429a, 502c.

⑬ Charmides, 168a.

⑭ Parmenides, 132b.

⑮ Ditto.

⑯ Politeia, 616e.

⑰ Ibid, 435a, 616e.

⑱ Nomoi, 816d.

⑲ Epistulae Ⅶ, 344b.

⑳ Phaidon, 103c.

㉑ Politeia, 523a.

㉒ Ditto.

㉓ Politeia, 537c.

㉔ Ibid, 546ab.

㉕ Ditto.

㉖ Pratagoras, 349b. Phaedrus, 265d, 273e.

㉗ Phaedrus, 249b.

㉘ Politeia, 396e.

㉙ Ibid, 476d, 506a.

㉚ Ibid, 560d.

㉛ Sophistes, 248e, 249a.

㉜ Politeia, 370e, 380d, 388d.

㉝ Ibid, 397d.

㉞ Ibid, 596b.

㉟ Philebos, 26b.

㊱ Politeia, 534b.

㊲ Ibid, 537c, 534b.

㊳ Ibid, 601d.

㊴ Ibid, 501a,540e, 567c.

㊵ Ibid, 521c, 522e, 523a.

㊶ Politeia, 596a.

㊷ Ibid, 424a, 449c.

㊸ Ibid, 531dff.

㊹ Ibid, 537c.

㊺ Ibid, 538a. Philebos, 16, 537c.

㊻ Ibid, 413c.

㊼ Ibid, 476ad, 505a.

㊽ Phaedrus, 247c. Phaidon, 83b. Politeia, 506c, 508c.

㊾ Politeia, 572c.

㊿ Ibid, 510d, 511a.d, 522c.

(51) Ibid, 510b.

(52) Ibid, 365c.

(53) Ibid, 377a.

(54) Protagoras, 330c. 360e. Menon, 100b. Phaedrus, 247d.

(55) Politeia, 342c.

(56) Ibid, 435a,

(57) Ibid, 328a.

(58) Ibid, 531d.

(59) Ibid, 538a～539a.

G.Grote, Plato and the other Companion of Socrates, vol. Ⅲ P.239 (1885).

(60) Ibid, 432c.

(61) Ibid, 376b, 474d, 480a.

(62) Ibid, 534b.

(63) Nomoi, 659d.

(64) Ditto.

ロゴスは万人に共通のものである。すなわち、魂の中核をなすロゴスの共通性によって、多の統一、反対の統一を行うのである。共通性によって綜合統一がなされるのである。共通性の一者は、常に多異なる反対のものを統一する。ロゴスはすべての人に共通であるとともに、それは不懐の統一的一者であって、常に普遍的なる原初的なるものへとおしすすめる働らきをなすものである。(Symposium, 187a. Sophistes, 242e.)

(65) Politeia, 357a, 357a, 582d, 607a.

(66) Herakleitos, Fragmente, 51, 8, 10.

(67) Ibid, Fragment, 54, 3, 7.

Weil gemein, an sich der Psyche offenbar, alles übersteigende Harmonie sophon Jener Urkoinzidenz, verborgen (Herakleitos, Fr. 54.)

⑱ Politeia, 510b.

⑲ Ibid, 533cd.

⑳ Ibid, 428b.

㉑ Lysis, 218b.

㉒ Symposium, 175cd.

㉓ Epistulae Ⅶ, 341c.

㉔ Gorgias, 506a.

㉕ Politeia, 462c.

㉖ Ibid, 366a.

㉗ Ibid, 427c.

㉘ Theaetetus, 189c～190a.

㉙ Philebos, 12a, 14b.

㉚ Phaidon, 91c.

㉛ Politeia, 376e, 392a.

㉜ Ibid, 462c.

㉝ Sophistes, 246d.

㉞ Ibid, 230c.

㉟ Gorgias, 4736.

㊱ Politeia, 499a, 505d, 534 c.

㊲ Sophistes, 230b.

㊳ Theaetetus, 149a.

㊴ Politeia, 376e, 392a.

㊵ Ibid, 578c.

㊶ Theaetetus, 149a.

㊷ Ditto.

㊸ Epistulae Ⅶ, 341cd.

㊹ Politeia, 507a.

㊺ Ibid, 605c, 578c.

㊻ Phaedrus, 276a.

㊼ Ibid, 276ab.

㊽ Politeia, 499a, 505d, 534c.

⑨⑨ Ibid, 428b.

⑩⑩ Ibid, 462c.

⑩① Ibid, 342c.

⑩② Ibid, 590e.

⑩③ Ibid, 534b.

⑩④ Theaetetus, 149a.

⑩⑤ Politeia, 534c.

⑩⑥ Ibid, 531d.

⑩⑦ Ibid, 489a.

⑩⑧ Ibid, 515d, 524a.

⑩⑨ Ibid, 376e.

第6章　哲人と教育

国家・国民を有徳にするには教育により更によい方法を他に求めることができない。教育は空虚なる頭脳へ新たに知識を注入することではなく、眼を光りに向けるごとく、理性をイデアへ向け、哲学的認識のはたらきを訓練することである。この訓練によって、魂に具備する生来の一切の能力が発展するのである。教育は人間精神が生来備えている認識能力を正しい方向へ導びくことである。これがためには精神の全面的訓練、すなわち、可視界から可思界への方向転換の訓練が必要である。この場合に、認識能力のみならず、魂全体が現象界から実在界へと眼を転じ、イデア界における最も光輝ある対象善のイデアの諦観にまで至らねばならない①。この任務を果すものは理性の思索力（ἡ τοῦ φρονησεως ἀρετή）②であって、これによって得られるものは神的なるものである。理性は人間の魂のうちに存在する神的要素であって、この要素を発展せしめることが教育の最高の使命である。これがためには、理性の自然的発動を妨げる、理性にとって有害なる欲情（ἐπιθυμία）③は除去されなければならない④。

哲人となり得ない民衆は、普通の職業に従事し、善良なる市民として活動し、法律制度の原則まで認識することはできえないにしても、多少とも正しい臆見（δόξα ὀρθή）[5]によって、法律制度の妥当なことを理解してこれを遵奉しなければならない。哲人が目指すところのものは、諸々の徳の上にあって、且つそれらを統一する太陽ともいうべき徳、すなわち、純粋に哲学的な魂の限りなき渇望をもって目指すところの善のイデア（ἡ τοῦ ἀγαθοῦ ἰδέα）[6]である。善のイデアは正義（δικαιοσύνη）[7]・節制（σωφροσύνη）[8]・勇気（ἀνδρεία）[9]・知恵（ροφία）[10]の四大主徳をはじめ、一切の諸徳の知識をして有用且つ有益ならしめる根源である。諸徳の根源たる善のイデアを目指して、これを愛求する哲人を除いては、よく諸徳を実現し、国家・国民を有徳ならしめることは不可能である。[11]

プラトンにとっては、人間が生きているのは善を実現するためである。善は人間にとって最も願わしいものである。善は人間が生きるための理想であり実現すべき目的である。善は道徳の中核であり、諸徳をして諸徳たらしめる本質的属性である。善はあらゆる徳の支配者であり、一切のもの、国家も国民も、これらのものをして正しい姿において維持するための統一者である。真に善を追求するものは、単に外面的な一つの美わしいこと、正しいことに満足することなく、真実に美わしいもの、正しいもの、すなわち真に善きものを身につけるように努めなければならない。国家を善くし、国家を有徳にし、善を実現して国民を幸福にせんとすれば、国家の統治者・国民の指導者は善のイデアを認識し、善のイデアについての知見（φρόνησις）[12]をもつものでなければならない。国家の統治者として国家国民を有徳ならしめるためには、先ず個々の具体的な場合において何が善であるか、何が不善であるかについての目晰な知見をもつ者でなければならない。[13]

真によき国家は国家を統治する国王が哲人（φιλόσοφος）[14]であるか、哲人が国王（βασιλεύς）[15]とならなければならない。政治的権力（κύρος）が哲学（φιλοσοφία）[16]と一つとなるのでなければ、そうして哲学を追求せずして、もっぱら政治的権力をのみ追求する多くの人々が排除されるのでなければ、理想的な善なる国家は実現されない。すなわち、哲人政治が実現されるまでは、理

想国家は現実とはならないし、われわれは善のイデアの太陽のごとき光を見ることはできないであろう。哲人政治によって善の太陽の光に浴することを得しめる以外には、国家にとっても、国民にとっても、幸福（εὐδαιμονία）[17]に到達する途がないのである。[18]

プラトンの理想国家は哲人が神意をもって統治する国家である。倫理的規範が第一義的で、法規範は倫理規範の遵守を確保するための手段として制定されるのである。法規範の存在の意義は倫理規範の維持にある。国家は国民をしてイデア的人間、最も倫理的・道徳的な人格を有する人間に形成することをその目的とするものである。そのためには国家自体が倫理的な秩序を有するものでなければならない。国家自体が有徳で、倫理的な存在であるためには、国家は哲人（φιλόσοφος）[19]によって統治されねばならない。現象界の生滅流転を超越し、恒久的実在・イデアの認識を追求し、すべてのことがらについて全体的知識を熱愛することが哲人の特質である。哲人は真理に対しては燃ゆる情熱を有するのであるが、物質的快楽に対しては全く無関心である。哲人は節制的（σώφρων）[20]であるが、決して愛金家（φιλοχρήματος）[21]ではない。哲人は神の世界と人間の世界を通じて、全体と普遍を求めて止まない、高潔にして宏大なる精神の持主である。哲人は信念（πίστις）[22]のために勇敢であり、怯懦と奴隷的精神を排斥する。哲人は醜悪の敵であり、学芸の神ムーサ（Μοῦσα）[23]の友である。彼は適度（σωφροσύνη）[24]と釣合（εὔμετρια）[25]の性向を備えている。これらの性向は、すべてイデアを熱愛することによって生ずるものである。一切の徳は真理に対する愛求から生まれるのである。しかるに、かくのごとき哲人が、国家において尊敬されず、無用の長物視されている状態を見るとき、その罪は果して哲人にあるのであろうか、それとも国家にあるのであろうか。その罪は知徳の高い哲人にあるのではなく、かかる哲人を起用しようとしない現在の低劣な国家にあるのである。哲人が哲人政治家としての本領を充分に発揮するには真の国家が必要である。[26]

国家・国民を有徳にするには、教育によるより更によい方法を他に求めることができない。しかして、国民教育という偉大なる仕事を担当するものが哲人である。哲人は真理を求めてやむことのない愛知者であるから、政治のごとき

ことがらに携わることを好まないようにも考えられるが、かかる哲人は、プラトンにとっては真の哲人ではないのである。哲人は専門家ではなく、すべてのことについて、真理を究めようとする人であり、単なる理論知（λόγος）[27]のみでなく、実践知（πρᾶξις）[28]のともなった行知（ἐπιστήμη）[29]を求める人であるから、理論の世界にも実践の世界にも通じて探究を怠ることがない。すなわち、理論に傾いて実践の力が弱められるということはなく、また実践に傾いて理論が弱められるということもない。[30]

政治家は国民の最大の教育者でなければならないから、政治家は哲人でなければならないということがプラトンの教説、特に国家論（πολιτζία）の本旨である。哲人がいかにして、国家において、政治をすべきであるかということについてプラトンは、これを牧人にたとえて説明している。[31]牧人は羊の群を単に飼養するだけではなく、それを見張って、よく世話するもの（ἀγελαιο κομιδή）として説いている。[32]牧人は羊を産むものではなく、それを世話するものである。牧人は羊の所有者に雇われて、その世話に当っているものである。これと同じく政治家は人民を世話する役目をするものである。政治家に与えられた仕事は、人民を育成指導して、調和と秩序のある統一的組織をもった、正義を実現する有徳な国家を形成することである。すなわち、政治家は国家のイデア国家の理念に従って、人民をよきものに形成してゆく仕事をなすものである。形成をする仕事を担当する人は制作者（δημιουργός）[33]と模倣者（μιμητής）[34]とである。制作者はイデアを見つめながら、イデア的にものを作ってゆく人である。イデア自体は神の創造するところのものであって、人間はただ制作・模倣の原型としてこれを認識し、諦観するのである。模倣者はイデアの模像を感覚的においてつくる人である。芸術家はイデアそれ自体を探究することなく、美しい彫塑・美しい絵画・美しい音楽・美しい建築物を形成する人である。これらの人の形成物はイデアの模像にすぎないのである。芸術家はすべて模像者である。しかし政治家は模倣者ではなく、制作者である。もし政治家が制作者でなければ、真の政治家ということができない。真の政治家は、真に存在するイデアのありのままを素材のうちに形成するのである。模倣者はイデアを模写するのであるが、その模倣は真のものの仮象にすぎない。

政治家においても真の哲人政治家と真の哲人政治家でないものとの区別があり、真の政治家はデミウルゴス（δημιουργός）であるが、真の政治家でないものはミメーテース（μιμητής）である。[35] 真の哲人のみが明確にイデアを認識し、真の国家のイデアに従って、現実の国家を形成することができるのである。偽りの哲人ソフィストらは真の国家のイデアを把握していないので、国家の模倣者であって、真の国家の制作者ではありえない。

哲人はイデアを認識し、それを知る有徳な人である。哲人政治家は理論知と実践知、すなわち、行知（ἐπιστήμη）[36] を有する人でなければならない。政治家は、イデアをいかにして現実の国家に実現しうるかということについての知恵がなければならない。政治家の知恵は善悪正邪・適不適の判断が正確でなければならない。これは測定術（μετρική）[37] といわれるものである。政治家の測定術は極端に走らない中庸で節度あるものである。この中庸なるもの（τό μέσον）[38] を基準として測定するのである。すなわち、ある事柄を行うについて、その事柄を行うのが、その場合に応わしいか（τὸ μέτριον）[39]、適宜であるか（τὸ πρέπον）[40] について判断し、測定する知性がなければならない。これが政治家の実践知であり、術知である。[41]

政治家の測定は、国家内の雑多なる現象を秩序調和あらしめることである。この場合に必要なのが測定の尺度である。その測度の尺度は数学者の用いる測定学である地面測定学（γεωμετρία）[42] や立体測定学（στερεομετρία）[43] ではなく、中庸測定学（μεσονμετρία）[44] で、これは人間の行為や人間の形成に関しての基準を定めるものである。政治家の仕事は人間の形成であり、人間を素材として、善き正しい国家を形成することである。これらの形成を可能ならしめる基準が中庸測定学である。その尺度は国家の形成において、人間の形成において働らいているところのイデアにほかならない。超越的なるイデアが形成者を通して形成さるべき国家または人間に臨在化される。勿論数字は最も精密・正確なものであるが、善悪正邪のごとき事柄の判定の基準にはなりえないのである。これについてアリストテレスは「数学的諸学術は、善きものや悪しきものについて何らの判定をもなさない」とのべている。人間の測定術・国家の測定術は神を尺度とするものでなければならない。[45] プロダゴラスは人は万物の尺度

であるといったのであるが、人間には千差万別のものがあるから尺度にはならない。神は善そのもの、美そのもの、正そのものであるから、すべての価値的なるものの測定の基準となり得る。いかなる人間が善であるか、いかなる国家が善であるかの測定は、善のイデアによって測定されるべきである。人間の制作には、善きもの美わしきものが沢山あるが、わけても善美なるものは、善美なる人間の形成であり、正善なる国家の形成である。この点において、哲人政治家は、芸術家に勝って最高の制作者である。[46]

国家を統治し、国民を指導する政治家は知恵の徳を代表するものである。それは単なる理論知のみでなく、実践知をも含んだものであるからである。それは学術的な知識も技術的な知識も含み、しかも熟慮（εὐβουλία）[47]の徳が加わったものである。熟慮は国家全体についての全体的普遍的な知恵（σοφία）[48]である。

また勇気の徳を代表するものは武人である。勇気のない武人は吠えない犬にひとしく、国家防衛においても、公安維持においても、国家の奉仕者たることができない。更に節制の徳を代表するものが産業人としての一般市民である。節制とは自己が自己を制することを意味する。自己の魂のうちにある理性的なるもの（λόγος）[49]欲情的なるもの（ἐπιθυμία）[50]を制御することが節制である。節制の徳は個人のうちにおいてあるのみならず、国家においても、理性的なる統治者が欲情的なる人民を支配するところに、節制のある正しい国家が成立する。正義（δικαιοσύνη）[51]の徳は、一つの階級のみに属する徳ではなく、国家全体に関する徳である。正義の徳は、他の徳が過不及なく、よく中庸を得て、且つよく調和するときにあらわれる。諸階級がよくそれぞれの徳を行い、各階級が調和と秩序を保つときにあらわれるものである。支配者はよき天性を有し、よき教育をうけた人々である。哲人は理性をもち（μετὰ νοῦ）[52]、最高の節制の徳をもつ。武人は正しい臆見に導びかれた（μετ' ὀρθῆς δόξης）[53]節制をもつ。正しい臆見は習慣と訓練とによって修得された知識であって最高の知識ではないが実践知として誤りのないものである。武人は統治者に忠順であり、金銭的欲望や肉体的欲望を自制することにつとめねばならない。第三階級たる一般市民は教育されることが少ないので、真知（ἐπίστημθ）[54]も正しい臆見（δόξη ὀρθη）

も十分にもたないが、他律的訓練により、節度（σωφροσύνη）[55]の徳を涵養するようにつとめしめるのである。かくのごとくにして、正義の実現した国家・国民を形成することができるのである。[56]

註 ① Politeia, 518c.

② Ibid,428b, 518e.

③ Ibid, 558d.

④ Ibid, 564a, 571a, 581a.

⑤ Menon, 85c, 86a 97b, 98c.

⑥ Politeia, 505a, 508e, 534c, 596b. Parmenides, 132a～c.

⑦ Ibid, 432a, 433bc.

⑧ Ibid, 489d, 430d, 432a, 441d.

⑨ Ibid, 375a, 430b.

⑩ Ibid, 428b, 489b, 568a, 607b.

⑪ Ibid, 474d, 480a.

⑫ Ibid, 428b, 518e.

⑬ Ibid, 427d.
Nettleship, Lectures on the Republic of Plato, P.61ff.

⑭ Politeia, 376e, 474d.

⑮ Ibid, 597e.

⑯ Ibid, 403c, 522a, 548b.

⑰ Ibid, 422e, 450c.

⑱ Ibid, 473de.

⑲ Ibid, 376b, 474d, 480a, 484a, 506c.

⑳ Politeia, 380b, 471a.

㉑ Ibid, 436a, 550c, 580e, 581a.
φιλοχρήματον と ἐπιθυμητικόν は同意味である。

㉒ Ibid, 511e, 601e.

㉓ Ibid, 375e.

㉔ Ibid, 389d.

㉕ Ibid, 432c.

㉖ Ibid, 489ab.

㉗ Politeia, 357a, 511b, 582d, 607a.

㉘ Ibid, 452a.

㉙ Ibid, 342c.

㉚ Ibid, 430e, 433ab, 442e.

㉛ Ibid, 440d, 516a.

㉜ Politicus, 275d.

㉝ Ibid, 270a, 237b. Philebos, 276. Sophistes, 265c.

㉞ Politeia, 359bc.

㉟ Politicus, 270a, 273b.

㊱ Politeia, 342c.

㊲ Politicus, 284e.

㊳ Philebos, 17a.

㊴ Politicus, 284e. Philebos, 66a.

㊵ Timaeus, 47b.

㊶ Politicus, 284c.

㊷ Politeia, 526c, 527c.

㊸ Ibid, 527d, 528b.

㊹ Philebos, 17a.

㊺ Aristoteles, Metaphysica, A5, 996a8.

㊻ Politeia, 376b, 474d, 480a, 484a, 506e.

㊼ Ibid, 348d, 428b.

㊽ Ibid, 428b.

㊾ Ibid, 511b, 582d, 907a.

㊿ Ibid, 558d.

(51) Ibid,432a.

(52) Politeia, 432a.

(53) Parmenides, 145c.

(54) Menon, 85c, 86a, 97b, 98c.

(55) Politeia, 342c.

㊻ Ibid, 389d.

㊼ Ibid, 427e, 434a.

参 考 文 献

1. Alline : Histoire de texte de Platon, Paris, 1915.
2. Apelt : Platon-Index, Leibzig, 1923.
3. Ast : Lexicon Platonicum, 3vols, Berlin, 1835.
4. Apelt : Sophist, Oxford, 1911.
5. Barker : Plato and his Predecessors, London, 1917.
6. Benn : The Greek Philosophers. London, 1914.
7. Boutroux : Etudes d'histoire de la Philosophie, Paris, 1897.
8. Bonitz : Platonische Studien, Berlin, 1886.
9. Bréhier : Histoire de la Philosophie, Paris, 1926.
10. Burnet : Phaedon, Oxford, 19911.
11. 〃 Platonism, California, 1928.
12. 〃 Farly Greek Philosophy, London, 1920.
13. 〃 Greek Philosophy, London, 1914.
14. Bury : Philebos, Cambridge, 1897.
15. Campbell : Sophist and Statesman, Cambridge, 1867.
16. 〃 Republic, 3 vols, Oxford, 1902.
17. 〃 Theaetetus, Oxford, 1883.
18. Diels : Die Fragmente der Varsokratiker, Berlin, 1912.
19. England : Laws, London, 1921.
20. Fouillée : La Philosophie de Sokrates, 2 vols, Paris, 1874.
21. 〃 : La Philosophie des Platon, 4 vols, Paris, 1888.
22. Frank : Plato and die sogenanten Pythagoreyer, Halle, 1923.
23. Friedländer : Platon (Eidos, Paideia, Dialogos) 2bode, Berlin und Leipzig, 1928.
24. Goebel : Die vorsokratische Philosophie, Bonn, 1910.
25. Gomperz : Griechischer Denker, Leipzig, 1903.

26. Grote : Plato and the other companions of Socrates, London, 1875.
27. Howald : Letters, Zürich, 1923.
28. Heath : A History of Greek Mathematics 2 vols, Oxford, 1921.
29. Halevy : La Théorie Platonicienne des Science, Paris, 1896.
30. Heinze : Die Lehre von Logos in der griechischen Philosophie, Oldenburg, 1872.
31. Jaël : Geschichte der antiken Philosophie, Thübingen, 1921.
32. Jowett and : Republic 3 vols, Oxford, 1902.
33. Jaeger : Paideia, Berlin, 1934.
34. Jowett : The Dialogues, 5 vols, Oxford, 1925.
35. Krische : Die theologischen Lehre der griechischen Denker, Gättingen, 1840.
36. Lutoslawski : The Origin and Growth of Plato's Logic, London, 1905.
37. Martin : Timaeos, 2 vols, Paris, 1841.
38. More : Platonism, Princeton, 1917.
39. Natorp : Forschungen Zur Geschichte des Erkenntnis-Problems in Altertum, Berlin, 1884.
40. 〃 : Platons Ideenlehre, Leipzig, 1921.
41. Preller and Ritter : Historia Philosophiae Graecae, Gotha, 1903.
42. Ritter : Platon, 2vols, Münich,1910
43. 〃 Sokrates, Tübingen, 1913.
44. Rodier : Etude de Philosophie grecque, Paris, 1929.
45. 〃 L'Evotution de la Dialectique de Platon, Paris, 1905.
46. Robin : La Theoie platonicienne des Idées, Paris, 1908.
47. Raeder : Platons philosophische Entwicklung, Leipzig, 1905.
48. Shorey : The Unity of Plato's Thought, Chicago, 1905.
49. Stenzel : Metaphysik des Altertums, Breslau, 1917.
50. 〃 Studien zur Entwicklung der platonischen Dialektik, Breslau, 1917.
51. Taylor : Plato, London, 1926.
52. Überweg : Grundriss der Geschichte der Philosophie, Berlin, 1920.

53. Wilamowitz-Woellendarff : Platon, 2 vols, Berlin, 1920.
54. Windelband : Geschichte der antiken Philosophie, Münich, 1912.
55. Wundt : Geschichte der griechischen Ethik, 2 vols, Leipzig 1908.
56. Zeller : Platonische Studien, Thübingen, 1839.
57. 〃 : Die Philosophie der Griechen, Berlin, 1919.